
彼らが旅に出た理由

akane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らが旅に出た理由

【Nコード】

N6468Y

【作者名】

akane

【あらすじ】

【第1章】冒険者アルドが旅に出て地上の勇者と呼ばれるようになった理由とは。（全4話掲載済）【第2章】美貌の少年リンは、何故に吟遊詩人として故国を旅立っていったのか。（全8話掲載済）【第3章】勇者となったアルドが巻き込まれた戦いと、草原の娘との恋。（連載予定）【閑話】バートの過去（連載中）

この話は、ムーンライトノベルズで連載中の、「旅と精霊と大地の歌」（BL）の番外編です。オムニバス形式で、「旅と精霊と大地の歌」の主人公である勇者アルドと美貌の吟遊詩人リンの過去が

明らかになっていきます。

一章ずつ完結させていきますので、18歳未満の方やBLが苦手な方は本編を読まなくても大丈夫なはず（分かりにくければごめんなさい）。

残虐な表現が多発します。登場人物の被虐経験及びぎりぎりの性的な描写を含みますが、反社会的な行為を推奨する意図はありません。

最初にお読みください（12月5日更新）

この話は、ムーンライトノベルズで連載中の、「旅と精霊と大地の歌」（R18・BL）の番外編です。

オムニバス形式で、「旅と精霊と大地の歌」の主人公である勇者アルドと美貌の吟遊詩人リンの過去が明らかになっていきます。最後の章のみ、本編完結後のもう一つの選択肢の世界（パラレルワールド）を綴っていくつもりです。

一章ずつ完結させていきますので、18歳未満の方やBLが苦手な方は本編「旅と精霊と大地の歌」を読まなくても大丈夫なはず（分かりにくければごめんなさい）。

18歳以上の方で、両方読むという方は、まずは本編第20話「拒絶」の辺りまで進んでから第1章を読むことをお勧めします。（第2章は第2部の4話目くらいまで進んでから公開します。）

具体的な性描写は有りませんが、ぎりぎりの表現が多発します。暗い話や痛い話も多いです。特に、2章は登場人物の過去の被虐経験なども含まれますので、注意してください。

これらは、登場人物の性格を形成するのに不可欠なエピソードとして書きました。決して虐待等の反社会的行為を推奨する意図はありません。

途中、自作の歌が度々出てきます。実在する歌詞などと偶然一致した場合には、すぐに修正しますのでお知らせください（雰囲気似ている等のご容赦）。

掲載予定一覧（タイトルは未定です）

- 1章 地上の勇者（アルド16歳前半）
- 2章 宮廷の落とし子（リン13歳〜15歳）
- 3章 草原の花嫁（アルド16歳後半）

- 4章 砂漠の花（リン15歳後半）
 - 5章 精霊と神々（アルド17歳前半）
 - 6章 呪われた旅路（リン16歳）
 - 7章 森の怪物（アルド17歳後半）
 - 8章 豎琴の精霊（リン6～13歳）
 - 9章 再びの旅（本編完結後）
 - 閑話 二人以外の登場人物の話
- 各章2～8話程度。

4章以降は変更するかもしれませんが、このような予定で行きたいと思っております。

予定が変われば、ここに追記していきます。

若干内容を変更しました。（12月5日）

登場人物紹介（本編開始直後）

アルド

18歳 Aランク冒険者 剣士 セガン帝国出身

大地神に授けられた力と使命によって、魔物を討伐すべく旅をしている。

リン

18歳（推定） 見た目は15歳 黒髪的美貌の少年 吟遊詩人
ラザ皇国出身

ある呪われた契約によって、『迷宮の核』を収集する旅に出ている。

最初にお読みください（12月5日更新）（後書き）

二つの小説の関連情報や更新予定については、後書きか活動報告（作者名クリックでマイページに飛びます）に記載します。
よろしくお願ひします。

「アルダリウス様！」

今日も家宰のバートの怒声が響く。この有能な家宰はアルドが子ども頃から教育係として仕えており、その役目を終えた後に能力を見込まれて家宰の地位に就いてからも、何かとアルドの世話を焼いていた。

「どうしてここにいます。今日は、聖都からお招きした光の魔術師殿の特別講義があるはずでしょう。」

神殿に行っているはずのアルドがここにいて、バートは憤慨していた。

「……あれにはもう行きたくない。」

アルドは光の魔法の習得に熱心になれなかった。父親から受け継いだこの魔力はわずかなもので、せいぜい夜道を照らすか、かすり傷を治療するか程度しかできなかった。

自分には才能が無い、と達観した顔でアルドは呟く。

「だからこそ、鍛錬するんでしょうが。」

苛々してバートは言った。

「いいんだ。そんなことより剣の腕を磨きたい。」

アルドは兄を亡くした8歳の頃から、ウィルド伯爵家の嫡子として聖騎士になるための訓練を受けていた。だが、太陽神の神殿に使用え、光の魔法で分かりやすい奇跡を起こして民の心を掌握する聖騎士の役目は、自分には向いていないと思っていた。そして、父親である先代ウィルド伯爵が死去してからというもの、自分に重く押しかかる家や職責に、アルドはつぶされそうになっていた。

アルドの祖母ロザリーは先代皇帝の姪であり、神聖魔術師であった。太陽神に祝福を受けたアルドの祖父ジャン達とともに神の使命により冒険の旅に出て悪鬼を討伐し、滅びの危機にあったセガン帝国を救った。その後二人は結ばれ、当時下級貴族にすぎなかったウィルド家は、神殿に仕える聖騎士団の長として聖都に近いリアスを与えられ、伯爵に叙せられた。

ただし、王位継承権もあつたロザリーを元冒険者のジャンに正式に降嫁させるわけにはいかず、勘当という形をとつた。また、本来リアス領主なら公爵位にある者になつてしかるべきのだが、ジャンに与えられた爵位は神殿に仕えることを優先した二人のために、伯爵位にとどめられた。

アルドの母がウィルド家より身分の高い侯爵家の出身であるのも、こつした経緯があつてに他ならない。

魔物との戦いに破れて亡くなつた父の代わりに、伯爵家は叔父が見てくれていた。しかし、この叔父は光の魔力が全く無く無く聖騎士でもないため、聖騎士の家系であるウィルド家を継ぐわけに行かない。^{リアス}領地を守り治めるのは今のところバートが実務を行っており、母の実家である侯爵家も何かと手助けをしてきている。

聖騎士団は、父の頃からの優秀な部下と、神殿に強いコネクションを持ち、自身も卓越した神聖魔法使いである祖母によって辛うじて支えられている。

その全てを、いつか自分は継がなくてはならない。自分と違って優秀だつた兄のことを思い出す。

ああ、旅に出たい。いつかは連れ戻されてこの家に縛り付けられるとしても、自分の可能性を試したい。太陽神と天空神に見込まれて冒険の旅に出た祖父のように。

アルドの潜在的な冒険心は、祖父と祖母から譲り受けたものである。
ろう。

そして、16歳になったのを機に、アルドはロザリーとバートに
書き置きを残して出奔した。

アルドは当ても無く北へ向かっていた。父を殺した強大な魔物に
今すぐ打ち勝とうなどと考えていた訳ではない。そこまで無謀では
ないが、父の最後の出征となった北への旅路を何となく追っていた
だけである。

父の形見の一振りの片手剣と少々の路銀だけを持ち、身分を隠し
てFランクの剣士として新たに冒険者ギルドに登録した。そして国
を歩き来するのに必要なIDカードと冒険者だけが持つ特殊収納で
ある『バッグ』を手に入れ、北の連合諸国を放浪する。

アルドはもともと剣に天賦の才能があった。手練の剣士達の試合
を見るだけである程度は剣筋を覚えることができたし、数回手合わ
せをすれば、たいていの技は習得できた。

そして、多少無茶な道程で手強い魔物を打ち倒して行くうちに経
験値を積み、冒険者としてのランクも上がっていった。

剣の腕を上げながらギルドのクエストをこなしてBランクになっ
た頃、この地に伝わる、とある伝説を聞いた。

北東の雪山の頂に、人の言葉を理解し強大な力を持つ不思議な魔
獣が棲んでおり、打ち倒せば伝説の武器と獣の力が得られると言っ
た。アルドは、その不思議な地に行ってみる気になった。

冒険者酒場で聞いて雪山の装備を整え、さほど高くはない山を登り始める。辺りはすつきりと晴れていた。途中、冒険者らしい一人の男の姿を見た。彼も不思議な魔獣と伝説の武器を探しているのだろうか。

半日ほど歩き、山頂に着いたアルドは、麓の里の老人から教わった目印の岩や古木を慎重に追いながら、長い稜線を歩く。最初は良かった天候だが、夕刻になるにつれて、だんだん曇って風が出てきた。吹雪になるかもしれない。その場合には雪洞を掘って、吹雪が過ぎるのを待とう。食料も防寒の魔法具も準備してきている。

そこへ、一匹の狐が現れた。白銀の毛をしているので、ただの獣ではなく妖獣であることがわかる。だが、探している獣ではない。アルドは、不安定な足場の中で剣を構えた。妖狐はアルドに飛びかかった。その首を掻き切ろうとしたアルドは、慣れない雪の地面に足を滑らせ、谷へ向かって滑落していった。

アルドが目を覚ますと、自分の身体が何か柔らかい白銀色に包まれていた。雪に埋まってしまったのだろうか。だがその感触は温かい。不思議に思っただけで身じろぎする。

自分を包んでいたのは白い毛皮だった。しかも、生きて動いている。

「うわっ！」

驚いたアルドは思わず叫んだ。

「おお、起きたかの。」

毛皮の主は、異形の者だった。白く長い毛に覆われた全身はアルドより頭二つ分は大きく、大きな青い目、耳元まで裂けた口。腕は筋骨逞しく、鋭い爪を持っている。

「ああ、怖がらんでいい。僕は取って食ったりせん。」

アルドが初めて見る怪物のような姿に怯えるのを見て言った。

「おぬしは、その谷間で、剣に縋り付くようにして雪に埋まっておったのじゃ。運が良かったの。」

尾根から滑落する途中で無意識に岩に剣を突き立てて、谷底に落ちる前に止まったらしい。あれから吹雪になったらしく、そのまま埋まってしまったのだろう。尾根の反対側のなだらかな斜面は雪崩になったと言うから、アルドはずいぶん運が良かったと言えよう。

「僕は昨夜からおぬしを見ておったから、埋まっとるのに気付いて掘り出すことができたがの。」

吹雪は今後三日三晩続くと言う。掘り出してもらえねば、おそらく凍死してしまっただろう。

「すっかり冷えておったから、僕の毛皮で温めてやっておったのよ。」
辺りを見回すと、ここは石作りの古い建物のような場所だった。

今は昼過ぎだと言う。吹雪の音が微かに聞こえるが、部屋の中は暖かい。

アルドはこの異形の命の恩人に礼を言った。

「助けてくださりありがとうございます。」

「堅苦しい言葉遣いは無しにしておくれ。さあ、スープができておるから食べ。」

地上の勇者 2

熱いスープを飲みながら、アルドは里で聞いた伝説のことを語った。

「実は、この山に不思議な力を持つ魔獣がいると聞いてきたのだが。」

「雪男は笑って言った。」

「それは僕の事と、この先にある迷宮の魔物のことが混じっておるな。」

雪男の住処からほど近いところに、名も無い迷宮がある。自ら武器を取って戦う者しか入れないと言う。そこには強大な力をもつ魔物があり、打ち倒せば神の恩寵を受けた伝説の武器が手に入るらしい。雪男はここでその迷宮の番人をしているのだといった。

「あなたが伝説の武器を守っているのか。」

「いや。僕は人間どもが迷宮に何か悪さをせんように見張っているだけじゃ。」

「では、私が魔物を打ち倒して伝説の武器を手に入れることに問題はないな。」

「やめておけ。あれは強い。おぬしのような子どもでは歯が立たんよ。」

アルドはこれまでの旅路で、自分に敵うような強敵に出会ったことが無かった。それは天性の剣の才と、太陽神の恩寵を受けた『光の剣』のおかげであった。

アルドが装備している片手剣は、亡くなった父親の形見で、もとは祖父のものであった。光の力が込められ、悪しき魔を払うことのできる太陽神の恩寵の聖剣だった。祖父はこれがかつて強大な

悪鬼を打ち倒した。父もまた魔物と戦うのにこの剣を装備しており、剣にかけてあった自動帰還の魔法により、父の敗北と死をウィルド家に伝えたのであった。

ただ、この剣は、騎士として馬上で振るうのには適していたが、生粋の剣士の性質であるアルドには使い難かった。特殊効果も光の力で魔を払うもので、かつて祖父が打ち倒した悪鬼などには力を発揮したろうが、生身の強靱な肉体を持つ魔獣などには効果が薄い。

また、例の父の敵の魔物は光に耐性があったらしく、生き残りの騎士いわく、光の魔法はことごとく無力だったとのこと。この剣も同様だろう。

アルドは行き詰まりを感じていた。そこに、この伝説の武器の話を聞いて飛びついたというわけである。

「まあ、どのみち吹雪が収まるまでここからは出られん。」

アルドは、しばらくこの奇妙な山の住人に厄介になることにした。

雪男は親切だった。アルドに食べ物を与え、自分はもっぱら酒を飲んでいた。酔うと、これまでここに来た冒険者の話をした。今まで幾人もの冒険者が挑戦したが、誰もこの迷宮を制覇したことは無いと言う。アルドは黙って聞いていた。

そして、夜も更けた頃、雪男は、昔覚えた歌だと言ってある曲を歌い始めた。

我らは 永き眠りから目覚め

川となり 山々を下り 大地を覆う

草原を芽吹かせ 森を潤し やがて海へと旅立つ

光る雲は風にのり 故郷へと帰るだろう

再び 千年の眠りにつくために

雪男の声は、その異質な外見からは想像もできないほど、澄んでいた。

アルドが不可解だったことは、夜になるとアルドをその大きな毛むくじやらの体で包むように眠ることだった。

「なぜこのようにくつついて寝る必要がある？」

石の壁は吹雪を防ぎ、離れて寝たとしても凍死する心配は無い。

「まあ、よいではないか。」

白い毛皮は見た目どおり柔らかく、アルドは嫌な気持ちはしなかった。そのため、されるがままに抱かれて眠った。

夜半、アルドは不思議な感触に目が覚めた。

毛むくじやらだったはずの雪男の体が消え、変わりに白く滑らかな腕に包まれていたからだ。

背中に吐息を感じ、振り向くと、白銀の髪、大理石のような肌、

彫像と見まがうばかりの美貌の青年がそこに寝ていた。

青年はアルドの茶色い髪に顔を埋めるように眠っていたが、アルドが動いた気配に目を覚ました。あの雪男と同じ青い目をしている。

「ああ、見られてしもつたか。」

「あなたは、いったい何者だ。」

「……自分の名など、もう忘れた。」

青年は、アルドを抱いたまま話し始めた。

ずっと昔、自分がまだ人間だった時のこと。恩寵の武器を求めて迷宮の魔物に破れ死を覚悟した瞬間、神の使いだという『凍土の精霊』が現れた。その身を迷宮の守護に捧げるなら命だけは救ってやると言う。誓約を交わし、気付いた時には異形の姿となっていた。以来、ずっとここで迷宮を訪れる者を待ち続けているというのだっ

た。

「だが、それももうすぐ終わる。」

精霊の神託によると、近いうちに伝説の武器にふさわしい者が現れ、魔物に打ち勝ち、雪男の使命も終わるはずだと言う。

「それで、ここに近づく者らを注意深く見張っておったのだが、現れたのがおぬしのような子どもだったのじゃから、期待外れにもほどがあるわ。」

アルドは子ども扱いに憤慨しながらも、自分の運命を試してみようという気になっていた。もうすぐ現れるという神に選ばれし者、それが自分なのではないかという淡い期待に胸が高鳴った。

「おぬしは、儂が止めようが、迷宮に行く気なのだろう。」

アルドは黙っていた。

「おぬしはまだ若い。これから幾らでも機会はある。みすみす死んでくれるな。」

青年は、アルドを抱く腕に力を込める。

「儂は、多くの人間があつた魔物に破れるのを見てきた。死んでいった者らの中にはおぬしのような少年もおつたよ。」

アルドは、この異形の青年が孤独なのだとすることに思い当たる人里には帰れず、ひたすら自分の使命を終わらせる人を待ち続けているのだ。アルドはその事実に関心を打たれた。

アルドの天性の素質として、人の心の傷や苦しみが見えるという能力があった。アルドは特に人の思考を読むことに長けているわけではなかった（むしろ鈍感な方である）のだが、なぜか、人の抱える痛みや覆い隠された苦悩にだけは敏感に反応した。この性質が、アルドの今後の旅に影響を及ぼすことになるのだった。

アルドの背中を抱きしめる青年の肌は暖かく、その鼓動と吐息は確かに人間のものだった。

「おぬしがそれでも行くと言うなら、しばらく儂の元で過ごし充分に体が出来上がってからにするといい。吹雪が終われば剣の相手もしてやるう。」

アルドは頷いた。

いつしか眠ったようで、朝になると青年はあの見慣れた毛むくじやらの姿に戻っていた。

アルドは、促されるままに、雪男から剣を習った。彼は、その大柄な体躯からは想像できぬほど、緻密に剣を振るった。アルドがこれまでに見たどんな剣士のものより素早く正確で美しかった。もとは高名な剣士の家柄か、身分ある人に仕える騎士だったのではないだろうか。

いつものように、アルドはその剣の筋を正確に写し取り、己のものとしていく。その剣を受ける雪男は感嘆した。

「おお、意外にやるではないか。おぬしを見直したぞ。」

だが、雪男は淡々と剣を振るアルドに、一抹の不安を感じていた。この少年に、己が剣の天才だと言うことに対しての慢心はない。

しかし、謙虚に地味な鍛錬を積もうという意志もない。あるのはただ、強くなりたいという欲のみであろう。それが、まだ成長過程にあるアルドの強みでもあり、致命的な弱点にもなりそうだった。

彼は精霊に命を救われて神に誓約しこの迷宮の守護人となったが、授けられた使命というのは、ただ見守ることであった。

主に、迷宮にたどり着く前に力尽きた者らを大地に還すのが仕事であった。この辺りの土は年中凍り付いている。少し離れた麓の、春になれば溶ける日当りの良い場所を選んで、冒険者達を埋葬した。宝目当てで迷宮を荒そうとする冒険者のパーティーがいれば、雪の幻術で惑わし山を降りさせた。

時折、吹雪に巻かれた者をほとんど姿を見せないまま雪洞や洞穴に誘導し休ませることもあったが、アルドのように連れ帰って暖めてやり、会話を交わし、あまつさえ本当の姿を見せたことなど今までになかった。

谷でアルドを見つける少し前にも、一人の男が雪崩に巻き込まれる姿を見た。雪崩に吞まれたのでは、慌てて駆けつけ掘り出しても助かるどうかはわからない。搜索に時間がかかり夜が更ければ、雪男も自由には動けなくなる。雪男はそれもまた運命と諦め、雪に埋まった男を捜しには行かず、アルドを探し出すために谷を降りた。

雪男は考えた。自分は何故この少年にここまでしてやるのか。雪に覆われた凍土ではめったに見ない土のような茶色い髪を見かけ、珍しさを覚えた。それが谷を転げ落ちる姿を見て狼狽し、アルドが落ちた谷を探した。半ば雪に埋もれあどけなく眠るような顔を見て、懐かしい思いで連れ帰り、手当てしてやった。抱き上げると体温だけではない暖かさが伝わってきて、永く忘れ去っていた人恋しさに、そのまま腕に抱いて眠ってしまったのだ。

自分はこの少年をどうしようというのだろう。初めての出来事に、雪男は混乱していた。

吹雪が止んで5日後。雪男が食料調達に出かけて居ない隙に、アルドはその住処をそつと後にした。

迷宮に入って前半は順調だった。次々と襲いかかる氷の獣達は、アルドの敵ではなかった。冷たく光る蝙蝠や狼らを、剣を振るって砕いていく。ドロップアイテムを拾い、稀に出現する宝箱を開けて魔法装備などを収集し、特殊収納に仕舞った。

迷宮の中ボスは、雪女だった。美しい氷の面とは裏腹に強力な魔力を持ち、残忍な術を使う。

口から吹雪が吐き出されるのを飛び退って避ける。次に、雪女が

袖を振ると氷の刃が飛んできた。これも落ち着いて全て撃ち落とす。あの雪男が振るった、正確で美しい剣技を思い出しながら。

雪女に一瞬の隙ができたのを見逃さず、剣に光の力を込め、一気に振った。雪女は氷の塊となり、砕け散った。

オオオーン！

絶叫が響き、迷宮の壁が揺れる。壁や天井から、氷の礫が振ってくる。

アルドは氷礫を避けて走る。

そこへ、雪男が追いついた。

アルドは黙って出てきた気まずさから雪男を顧みず、そのまま最下層に向かう。アイテムも宝箱も放置して走った。

その時、床が崩れる。単純な罠トラップだった。

アルドの足もとが音を立てて崩壊し、気付いた時には最下層におり、氷の塊に埋まっていた。

「無茶しおってからに。」

氷に埋まったアルドを雪男が掘り出そうとする。その背後に、強大な影が近づく。迷宮のボス、魔獣メガトン・ベアであった。

この巨大な魔獣は、大きな体とは裏腹に素早い動きを持つ。魔力はほとんどないが、その爪は一撃でアルドの頭を吹っ飛ばすことができるだろう。

メガトン・ベアの一撃を雪男は飛んで避けた。アルドが埋まった氷塊が大きくえぐれる。

アルドは戦慄した。こんな所で動けないまま自分は死んでいくのか。その時、雪男がアルドを庇うように魔獣に対峙した。雪男が振るう剣はメガトン・ベアに正確に当たるが、ほとんど傷を与えないとはできないようだ。しかし、雪男は焦って倒そうとせず、落ち着

いて少しずつ体力を削るようにダメージを与えていく。メガトン・ベアの爪も幾らかは雪男に当たるが、神の力で変化した身体だからか、致命傷にはならないようだ。

雪男は、攻撃の合間にアルドが埋まった氷の塊に慎重に剣の一撃を与え、ひびを入れる。アルド自身にも衝撃が伝わった。

「アルド、逃げよ。」

アルドは魔力を最大限に手のひらに込め、熱を生み出す。拘束していた氷がゆるみ、アルドはようやく自由になった。

その時、雪男の体に変化が起きた。白く長かった毛が縮み、身体が一回り小さくなっていく。雪男は本来の人の姿に戻ってしまった。青年は、薄い布の服と剣以外には身につけていない。一撃でもまともに爪を喰らえば命は無いだろう。魔獣の攻撃をひらりと素早く躲しながら、さらに剣を打ち込んでいく。

アルドは我に返り、光の剣を握りしめると、メガトン・ベアに向かっていった。

ものすごい衝撃に、爪を受け止めた光の剣ごと吹き飛ばされ、気付くと冷たい土の上に横たわっていた。迷宮の最下層の床は氷ではなく、地面だった。

再びアルドの意識は遠のき、視界が暗くなっていく。メガトン・ベアの爪が銀髪の青年を襲う姿がぼんやりと見える。

「お前はここに来る予定ではなかった。」

アルドの頭に不思議な声が響く。

「あの時、谷底で死ぬ定めだった。今もまた、あの魔獣に倒され死にかけている。」

大地から伝わってくる言葉のようだ。

「お前はそこまでして力や剣が欲しいのか。」

「欲しい。」

アルドは、腹に力を込めて返事をする。何者にも打ち勝つ力を自在に操れる強力な剣を。

「父の敵を討つためか。」

アルドは考えた。力が必要な理由はそれだけではない。運命を自分の手で切り開くために欲しいのだ。

「お前には、本来その資格は無い。代償は大きいぞ。」

アルドに迷いは無かった。今のままでは、自分だけでなくあの青年まで巻き添えにして死なせてしまう。自分の無力さを噛み締め、力が得られるならどんな犠牲も厭わない気になっていた。

「では、誓え。」

地上の勇者として、大地神の使命に従うことを。生まれ持った魔力も太陽神の加護も捧げることが。そして、大地の子である人を受け

して殺めないということ。

アルドの脳裏に、ある歌詞と旋律が浮かぶ。

「全てを受け入れた承するなら、祈れ。そして歌うがいい。」

大地より生れ 大地に還る

母なる大地の その腕に

我ら 地上に生きる 全ての人よ

偉大なる大地よ

我らは大地の子

アルドが歌った時、その手に暖かい力がこもる。促されて大地に両手を付けると水面のように柔らかく、少し進むと手に何かに当たった。握りしめると、それは一振りの長剣だった。

「お前の生命と旅路を祝福する。その剣を存分に振るい、大地に巣喰う魔物らを打ち倒せ。」

その光景を目にし、迷宮を守護してきた青年は驚きつつも納得した。やはり彼が選ばれし者、『地上の勇者』だったのだ。一瞬気を取られた隙に、メガトン・ベアに肩を挟られる。傷口から血が噴き出し、意識が薄れる。

青年が倒れる瞬間に、アルドの持つ剣が強大な魔獣を倒すのを見た。

白い髪の少女の姿をした『凍土の精霊』が現れて二人に言った。

二人の傷はすっかり癒えている。

「もともとアルドは『大地の剣』を与えられる者ではなかったのよ。」

精霊いわく、迷宮の守護人である雪男が選んだ偶発的な出来事が

きっかけで、運命に歪みができたと言う。アルドは人間のみならず、精霊や特殊な存在を惹き付ける性質なのだろうか。

「本来、勇者になるべきだった人は、雪崩に巻き込まれて雪の下で眠っているわ。」

やはりあの時、と美しき青年は心を痛めた。

「あなたのせいではないわ。あなたがもしアルドではなく彼の元に駆けつけていたとしても、助かったかどうか分からない。あなたは結果として、救うべき方を救えたことになるわ。」

最悪、三人とも死ぬ運命もあったという。

精霊は、青年に労うように言った。

「あなたが選んだ彼への祝福は、今まで迷宮の守護人として働いてくれたあなたへの報酬の意味もあるの。今後は自由に生きて。」

そして、精霊はアルドに向かって強い眼差しで言う。

「与えてしまったものは仕方が無いわ。神の力と使命にふさわしい人間に、早くなりなさい。」

運命のいたずらにせよ、アルドは望み通り強大な力と剣を手に入れた。

誓約したのが大地神であることとその恩寵である『大地の剣』を与えられたことに、アルドは驚きと感動を隠せなかった。大地神の祝福を受けた者は、冒険者達の伝説の存在である『地上の勇者』と呼ばれるようになるからだ。

「あなたの旅は波乱に満ちたものになるでしょう。」

勇者としての使命を忘れず生きるよう、凍土の精霊は言った。

「僕は、人里に下りるのは数十年ぶりになる。」

夜が開けても雪男の姿に戻らなかつた青年が言った。アルドが宝箱から見つけたマントや防具を身につけ、身支度を整えた青年は、

王侯貴族のように凛々しく美しい。

「戻る国はもう無いが、新たな人生を生きることにするわい。」

アルドは、いつの日かの再会を祈って青年と固く握手し、やがて別々の方角に歩んでいった。

アルドが雪の山を降りた直後に、凍土の精霊ではない土色の髪をした娘が今後の事を告げに来た。娘は『沃地の精霊』を名乗った。

「あなたの實力では、その剣の本当の力を引き出すことは出来ないだろう。今のままでは、あなたの父の敵を討つことも叶わない。」

「どうすれば良いのですか。」

「旅を続けなさい。そこで新たな力が得られよう。」

精霊は、アルドに『精霊との対話』の術を授けた。

「常に、精霊の言葉に耳を傾けるといい。そこに大地の神の導きがある。」

また、新興の大地の神殿には礼拝しなくてかまわないが、道中の古い祠や聖地にはなるべく寄り、剣を捧げて『大地の歌』を歌うことをアルドに約束させた。

そして、旅の助けにと『地の呪縛』と『高速移動』の術も教えてくれた。

「後は、あなたの意思の赴くままに進んでかまわない。いずれ運命があなたを導くだろう。」

アルドは、神妙な面持ちで頷いた。

とりあえず、南に行こう。そして、故郷には帰らずに東に進もう。アルドはまだ見ぬ広大な草の海に思いを馳せた。

地上の勇者 4 (後書き)

地上の勇者 完

次回「宮廷の落とし子」に続く。

先にムーンライトノベルズに「旅と精霊と大地の歌」の第二章を掲載します。こちらの更新は週末になります。

宮廷の落とし子 1 (前書き)

リンの壮絶な過去です。
残虐な表現を含みます。人が死にます。性的な描写が有ります。充分にご注意ください。

宮廷の落とし子 1

リンは、自分の上に覆い被さった肉塊がおぞましくてしょうがなく、力を込めて押しつけた。先ほどまで、これは生きてリンを蹂躪していたのであるが。

リンは自分が握りしめている『妖魔刀』を確かめる。もう先ほどの輝きは失われていた。

首を絞められながら無理やり犯された身体のダメージは大きく、しばらくは動けそうにない。

リンは人を殺めるのは初めてだったが、不思議と恐怖は感じなかった。ただ、嫌悪で一杯だった。

そこへ大柄な男が入ってきた。男の目に邪悪な色は感じられない。役人だろうか。男は凄惨な光景に目を見張ったが、リンの側に転がった男の血まみれの死体と、少し離れたところに倒れた裸の男の身体を見比べると言った。

「……お前がやったのか。」

リンは頷き、半ば意図的に意識を失った。

ラザ皇国で近衛隊長と検察府の長を兼任しているジンは、ある犯罪人を追って最下層の娼館や麻薬窟がひしめく貧民街へと足を踏み入れた。そこに主に男娼を扱う一軒の楼があり、剣呑な噂も聞いていたため、ジンは念のために立ち寄った。

その館には何らかの術をかけてあるような気配がし、ジンは用心して進む。慎重に気配を探るが、特に変わったことはないようだ。その時、奇妙な雄叫びが聞こえた気がし、瞬く間に館に掛けられた呪術が解けた。声が起こった方向に走る。鍵のかかった扉を解錠の魔法具で慎重にひらいた。あっけなくあいたので、術者は死亡して

いるかもしれない。

そこで、先ほどの光景を目にすることになったのである。

意識を失った男娼らしき子どもを布でくるんで抱きかかえる。軽い。もう一人の男娼はすでに事切れているようだ。

手の甲に筋が浮かぶほどきつく握られた刀をどうしようか思い悩み、その細い手を両手でじっと包むと、しばらくして力が緩んだ。鞘はなかったため、これも布でくるんで運ぶ。

子どもの細い首に、力任せに締め上げただろう指の跡がついている。

目を閉じて小刻みに震える表情は幼く、陵辱され殺されそうになった上に殺人者の重荷を負わされた不憫な身の上を思う。

それにしても、美しい顔だ。殴られて少し腫れているが、長いまつげに通った鼻筋。肌は生粋のラザ人を思わせるような透明感のある象牙色で、やはりラザに多い真っ直ぐな黒髪は、伸ばすとさぞかし艶やかだろう。

ふと、この子どもの顔に見覚えがあることにジンは気付いた。

部下にその場の後処理を命じ、リンを屋敷に連れ帰る。ジン自ら湯で身体を拭いて服を着せる。温かい濡れた布の感触に、子どもが目を開けた。顔の雑作と小柄な体軀から子どもかと思っていたが、目を開けた表情を見て、年の頃は13、4歳だろうと思う。

「話せるか？」

ジンが優しく問う。

「お前は、以前にナナの所にいた子どもだろう。」

そう言いながら、ジンは先日亡くなってしまった、心やさしき娼婦を思い浮かべる。

たしか、子どもの名前はリンと言ったはずだ。

リンは、育ての親だった娼婦のなじみ客の一人にこんな男がいたのを思い出していた。

「俺はどうなる……?」

問いには答えずにリンは尋ねた。

「お前を殺そうとした呪術師は、数多くの男娼を殺して川に捨てた罪で手配されていた。お前のやったことが問われることは無い。」

「じゃあ、あの楼に戻っていいんだね。」

リンがジンの手を振りほどいて立ち上がるうとするのを制して言う。

「戻りたいのか?」

「他に何かある?」

「お前、この屋敷にしばらく滞在しないか。」

使用人も少ない男一人のむさ苦しい暮らしても良ければ、とジンは言った。

「哀れな少年男娼に対する同情かい?」

「お前に、ナナに対する不思議な縁を感じているだけだ。実は、俺は彼女に熱を上げていた。」

それから、といってジンは例の刀をくるんだ布をリンに差し出した。

「この刀に興味がある。『妖魔刀』だろう。どこでこんな物を?」

「俺と一緒に拾われた。扱ったのは今日が初めてだ。今まで固くて抜けなかったから。」

妖魔刀とは妖が封印された宝刀で、神通力によって造られるというが現存する物はほとんどない。刀に籠められた妖は、自ら主人を選んで仕え、認められない者は抜くことはできず、柄に触れるだけで妖に吞まれるという。見当たらなかつた鞘はいつの間にか戻ってきていた。

「お前がその気なら、刀の使い方を教えてやろう。」

ジンは、その美貌ゆえにこれからもリンに起こるだろう出来事を予想する。

「自分の身は自分で守れるようになれ。」

リンは、この強面の大柄な男の目をみて少し思案し、頷いた。

リンは、どこかの娼館に囲われている訳ではなく、楼に部屋を借り自分で客をとっているようだった。あのような犯罪に巻き込まれたのも無理はない。

あの呪術師の件は、ジンが諜報員と暗殺者を使い、秘密裏に始末したということになった。検察府の長にはそれぐらいの権限はある。そして、強い呪術の使い手ゆえになかなか捉えられなかった重罪人の討果はジンの手柄となった。それは、ジンが本来追跡していたのとは全く別人であったのだが。

ジンとリンの生活が始まった。

ジンは、リンの教師としてある聡明な女性を選んだ。あのような目に遭ってすぐのリンの心の傷を慮って、大人の男を避けたのだ。

女性はアキと言う名で、宮殿に仕え雑務を取り仕切っている。アキはジンが行き届かないリンの身の回りの世話にも細やかに気を配ってくれた。

リンは、驚くべき美貌の上に、たいそう賢い少年だった。一番得意なのは語学だった。アキが教えたのはほんの初歩だけだったが、瞬く間に独学で大陸中で使用される文字や語法を覚えた。そして、歴史や政治、魔法学に薬学など、多方面に興味を示し、明晰な思考や判断はジンをうならせるほどだ。魔力こそ無かったが、扱いの難しい魔法具も、教えればすぐに使いこなすようになった。

しばらく栄養のある食事と休養を取らせ適度に身体を動かさせる

と、肉が付いて背も伸び、体力も充分になった。剣術や体術、馬術などの飲み込みも早い。剣については、ラザ皇国名うての剣士であるジンが手ずから教えた。いずれは自分を凌ぐかもしれない、ジンはそう予感した。

ジンは、乾いた土に水がしみ込むように知識と技を吸収していくこの少年を、掌中の珠のように扱った。

宮廷の落とし子 2 (前書き)

残酷な描写が有ります。性的な描写が有ります。

宮廷の落とし子 2

ここで、ジンが懺悔すべきことがある。

連れ帰った少年を家に泊めた初めての晩。リンは、そつとジンの寢所に忍んできた。ジンは気配が少年のものであることを察し、優しく声をかけた。

「眠れないのか。」

環境が変わった直後で、ましてやあんな目に会ったばかりだ。無理も無いだろう。

「入っていいかい？」

ジンの上がけをめくり、リンが身体を隣に滑り込ませてきた。そのままジンの下半身に触れようとすることを強く制して言った。

「もう、お前がそんなことをする必要は無いんだ。」

リンは、言っている意味が分からないというような表情を浮かべた。

「まあいい。もう寝るぞ。」

ジンは、リンを後ろからきつく抱きしめたまま言った。背中から伝わる体温と呼吸の音に安心したのか、程なくリンは眠りについた。

次の夜もリンは同じ行動をとった。

不覚にも、ジンは不意をつかれて接吻されてしまった。

そして3日目の晩。

例えば、断固として拒否すべきだった。そもそも寢所に入れるべきではなかったのだ。

ジンは、その日例の重罪人を追いつめ捕縛した。その際に抵抗する賊らに刀を振るい、刃向かってきた者を返り討ちにした。戦いと流血に気が高ぶっていたのを理由にすべきではないのかもしれない

が、興奮を玄人女性に鎮めさせてから帰宅するあたりまえのことすら忘れていた。

その結果ジンは、リンに手と口を使つての行為を許してしまったのだ。

リンの技は熟練の娼婦のものに比べると未熟だったが、ジンを充分に昂らせた。そして、行為を終えたリンは心底満足そうな顔を浮かべてジンの腕の中で寝入った。ジンは自分の軽卒さを痛烈に感じたが、この少年が何者であっても全て受け入れようという、奇妙な諦念に至った。そして、乞われるままに与えよう。ただし、成長過程にあるリンの身体のことを慮り、あの直接的な交わりだけではどんなに求められてもしないと決めた。

後日聞き出したその時のリンの心境は、ジンの苦悩とは裏腹に実にはたわいないものだった。自分の持っているものでジンは喜びそうなものをただ差し出しただけだというのだ。当時は行為の価値も意味も何も考えていなかった、ただ贈り物を受け取ってもらったように嬉しかった、と当時を振り返ってリンは苦笑した。

しばらく一緒に暮らすうちに、リンのそのような行動もなくなつた。

リンは、技芸でも才能を發揮した。

ナナの形見だという銀の豎琴を常に傍らに置き、暇さえあれば曲を覚え、歌った。ジンはねだられるままに高価な譜面や教本を買い与え、琴にとどまらず様々な楽器の著名な演奏者に師事させた。

高度な技術を必要とする魔法曲も習得したが、残念なことに元々の魔力が無いため、充分な力を發揮することはできなかった。

歌唱にも才能があるようでひととき美しく豊かな声と確かな音感をもっているが、これは変声期になればどうなるかわからない。

ジンは、公的な仕事以外のあらゆる場面にリンを連れて行った。周囲の人間は、堅物のジンが一風変わった拾い物をし、自分の後継者として熱心に育てていることを知り、驚愕した。ジンの仕事仲間や友人らは実際にリンに会ってみるとその噂に違わぬ賢さに感心し、リン本人のみならずその才能を見いだしたジンに一目置いた。また、武術の鍛錬に付き合わされる若き近衛兵らは、美貌の少年と侮って手痛い目にあい、リンに憧憬と崇拜の念を向けた。

「お前の賢さと強さに、みんなが舌を巻いているぞ。」

「朴念仁のあんたが男娼あがりの少年を手元に置いてることが物珍しいだけさ。」

「そういうことを言うな。お前はもう、誰にも侮られない。」

引き取ってから一年が経った頃、宮廷主催で行われる武官らを慰問するための晩餐会にリンを伴った時のことだった。

近衛からラザ帝国軍に移籍し、すでに高い地位にあったジンに、この国の有力者の一人である宰相が声をかけてきた。仕事での繋がりはない。ジンは違和感を感じたが、武人の礼をとった。

「今日は職務上の話ではないのだ。」

宰相は、若い兵らと無邪気に談笑するリンを見て言った。

「あの少年を宮廷に出仕させる気はないか。」

ジンは、何が目的なのか訝しんだ。

「あの才能を埋もれさせるのは惜しい。もちろん、経歴は承知の上だ。」

たしかに、今のままではリンはただのジンの居候だ。公式的には何の立場も無い。宰相はリンに、年の近い皇太子の従者の地位を用意するつもりらしい。皇族の従者は年若い高官の子弟らが就く職で、出世のための第一歩と言える。

「ここだけの話だが、これはユイ殿の意向もある。」

宰相は、若くして母を失った皇太子の母親がわりを務めている、今上帝の寵妾の名を挙げた。

「本人に聞いてみます。」

リンが特に疑問も条件もなく了承したので、話は進められていった。

出仕する際に、さすがに拾ってきた男娼のままでは憚られるため海軍中將であるジンの正式な養子とし、名はリン・クイー・ガイ・イとなった。

14歳の半ば頃（といっても捨て子なので本当の誕生日は分からない）、皇太子の従者として宮廷に出仕した。

そこでリンを最初に待ち受けていた試練は、集団暴行だった。

先輩格にあたる少年らが企てた卑劣な行為だ。リンは宿直の日で帯刀していない時間帯を狙われ、闇討にあつた。

従者仲間ら数人でリンを囲み、暴行を加えていく。リンは、しばらく黙ってされるがままになっていた。

引倒され、地面に這い蹲らせられる。

「女みたいな顔をしゃがって。」

「男娼あがりかどうやって宮中（こうちゆう）に入り込んだ？」

「宰相が後ろ盾だからといって、いい気になるなよ。」

「どうせ中將（じゆう）もその身体で誑し込んだんだろう。」

「どんな具合なのか試してやるよ。」

少年らはリンを押さえつけて服を引き裂こうとする。そこまでされた時、リンの目に今までに無い殺気がみなぎった。

「それ以上続けるなら、お前たちは皆、ここで死ぬことになる。」

「何？」

「お前たちにいいようにされるぐらいなら、俺はお前らを皆殺しに

して死を選ぶ。」

不意をつかれた少年はリンに蹴倒される。

そして素早くリンは主犯格の少年の元に駆け寄り殴り倒した。

そのまま馬乗りになり、殴りつける。拳が切れて血がにじんだが気にもならなかった。

「こいつ！」

他の少年らが加勢し、一対多の乱闘になった。

リンは散々殴られて息も絶え絶えになりながらも、抵抗することを止めなかった。

主犯格の少年はとうに意識を失っていたが、リンは構わず殴り続ける。怒りに我を忘れて拳を振るうのは気分が良かったのだ。

リンの豹変ぶりに恐れを成した従者仲間の少年が、人呼びに行った。

間もなく、事の次第を聞きつけたジンがやってきた。そして、意識を失った少年を見て眉をひそめ、治癒魔法をかけ始めた。

リンは黙って見ている。

ジンが簡単に治療を済ませると、ジンに付き従っていた男が少年を担いでどこかに連れて行った。

リンがぼそぼそと口を開いた。口の中が切れていて喋るのも辛そうだ。ジンは呪文を唱えてリンの傷を癒してやった。

「俺が男娼あがりで女みたいだからって、寄ってたかって襲ってきたやつだ。外にはいくらでも女がいるってのにね。」

地面に血の混じった唾を吐きながらリンは言う。

「それは違っただろうな。」

ジンが否定したので、リンは眉をあげてジンの顔を見る。

「お前を支配し、服従させるためにやったんだ。」

リンの顔色が変わる。

「俺は、あいつらに支配されるのは絶対に嫌だ。」
リンの目が怒りに燃えているのとは裏腹に、ジンは冷静な目でリンを見ていた。

「怒りに身を任せるのは気持ち良かったか？」

ジンに聞かれ、リンははっとした。

「場末の娼館の少年らが起こす争い事なら、お前の取った行動は正しいかもしれない。だが、ここは宮殿だ。」

「どういう意味……？」

「お前が半殺しにした少年は、内務大臣の甥だ。むやみに傷付ければ、俺もお前も窮地に立つことになる。それに、いずれ報復されるだろうな。」

内務大臣は、リンを従者に推薦した宰相の政敵だった。

リンは、ジンの言葉を真剣な面持ちで聞いている。

「もっと賢くなることだな。戦うなどは言わん。だが、やるなら確実にしとめないと、自分の身が危うくなるぞ。」

武人としてこれまでも宮廷の側で生きてきたジンは、自らの経験からそうリンに忠告した。

宮廷の落とし子 3 (前書き)

残酷な描写が有ります。

宮廷の落とし子 3

そして、数日後、またもリンに危機が訪れた。

何者かがリンの食事に毒を盛ったのだ。体力があつたリンは、二晩苦しんだあげくに一命を取り留めた。後遺症が無かつたのは幸いだった。

使われた毒は、時間をおいて繰り返し服用者に発作的な苦痛を与える残酷な物だった。あまりの苦しみに、リンは発作の合間に何度も叫んだ。

「いつそ殺してくれ！」

ジンはリンに毒や暗殺の知識をつけていなかったことを痛烈に悔やむ。自分が予言したことながら、リンの身に起こった事にジンはいたたまれなかつた。自分の宮中での立場などより、リンの生命が大事だった。

だが、そんなジンの思いも知らず、意識を取り戻したリンは壮絶な笑みを浮かべて言った。

「即死効果のある毒を選ばなかつたことを後悔させてやる。」

リンが毒のダメージから回復し、従者の任務に戻った頃のこと。

宰相は、とある間諜と暗殺を生業とする専門家をリンの師として呼び寄せた。

この毒物の師匠の指導により、リンは国内外からあらゆる毒を取り寄せて研究した。色・匂い・味を覚え、時には致死量を見極めて自分の身をもって試し、毒への耐性を付けていく。この手っ取り早い方法は苦痛の多いものだったが、リンは受け入れた。

「仕方ないだろう。こんな所で死ぬわけにいかないからね。」

「辛いなら、出仕自体を止めたっていいんだぞ。」

しかし、たとえ宮殿勤めを辞めたとしても毒に対する知識や耐性

は必要になるかもしれないと思い、ジンは黙って見守った。

宰相が付けた師は、リンに毒物以外の知識や術も、密かに伝授した。

リンは、程なく毒を盛った犯人を突き止めた。

やはりあいつか。リンはある決心をした。

ある日、例の襲撃の主犯だった内務大臣の甥は、宿直中に山犬に襲われて死んだ。死体はぼろぼろに喰われていた。彼がなぜ持ち場を離れて山犬のいるような野を彷徨っていたのかは分からなかった。捜査は宰相の差し金によって打ち切られた。

リンは引き続き、毒物に関しての知識を習得し、毒への抵抗力を身につけていった。

だが、毒に関しては玄人^{プロ}と呼べるほどになったのと引き換えに、リンは食べる喜びを失ってしまった。ちょうど、あの内務大臣の甥だった従者の少年が、遺体で発見された時期と重なる。

「何を食べても、味や匂いがばらばらにしかしない。美味いという感覚が分からなくなったんだ。」

リンは悲しげにそう言った。

味覚に鋭敏になりすぎた挙げ句に、時たま起こる事象である。

そして、そのことはリンの精神をじわじわ浸食した。食が細くなり、時には食物に毒が入っている錯覚を起こして嘔吐することすらあった。

痩せていくリンを心配したジンは、リンの気心知れた少女の手を借りることにした。

少女はミヤという名で、ナナの属していた娼館の見習いである。

栗色の髪に鶯色の瞳の愛らしい顔立ちをしていた。リンより一ツ年下で、まだ客は取っていない。リンはこの少女を妹のように可愛が

っている。

体調が思わしくなかったためにジンの屋敷の自室に籠っていたリンに、ミヤは何やら可愛らしい籠を手にして会いに来た。

「暇だったから、どんな顔して従者をやってるのか見に来たわ。」

「君も元気そうで安心したよ。」

素直じゃない口調だが、リンのことを気遣って会いに来ているのが分かり、リンは久しぶりに安らぎを覚えていた。また、この少女が娼館という過酷な環境の中でも自分を見失わず健気に生きていることに、リンは安堵した。

「このお菓子は、別にあなたのために作ってきたんじゃないけど、余ったからあげるわ。」

「ありがとう。でも、最近食欲が無くてね。」

「私の作った物が食べられないって言うの？」

「……食べるよ。」

リンは苦笑して籠に入れられた菓子を受け取った。

ミヤは不安げな顔でリンの挙動を見つめている。鳶色の瞳が潤みそうだった。

菓子は、木の実を蜜で固めて果皮の香りを付けたものである。その懐かしい香りは、ナナが昔好んでいた柑橘類だった。

リンは思い切って菓子を口ににする。甘くて爽やかな香りがする。噛むとさくつと香ばしい。もちろん、毒の味はしない。それだけでなく、リンは確かに『美味しい』と感じた。久しぶりの感覚に、リンは目が覚めるようだった。

「当然でしょ。私がつったんだもの。」

顔を赤らめるミヤにリンは礼を言った。

心に余裕ができたリンは、自室に飾られた優しい香りの花にようやく目がいく。アキが毎日来て、気分のすぐれないリンのために花

を替えているのだ。優しい気遣いを思うと、胸がいつぱいになった。

馬鹿なことをしたもんだ。リンは、やせ細った自分の手を見て忸怩たる思いだった。自らを痛めつけてどうするのだ。自分は支えられ、生かされている。こんなことに負けるわけにはいかない。

それに、自分は何を拒絶していたんだろう。食べることはこんなに穏やかな幸せをもたらすというのに。

リンは、毒を感知する目的で食味を認識することと、自身のために味わい食べることを、切り離して考えられるようになった。

従者として宮殿に出仕する日々は、リンに多くを学ばせた。

従者の仕事の傍ら、リンはアキの助言により勉学を続けた。アキの計らいで貴重な書を集めた館へ出入りできるようになったリンは、ラザのみならず大陸各地の書を読み、知識を蓄えていった。

アキは、リンがジンの家に居候を始めた頃に学問を教えてくれていた師でもあり、リンの良き姉のような存在になっていた。

リンは疑問に思っていた。アキは、なぜ宮殿の雑用係などに甘んじているのだろう。あの賢さや知識、教養をもってすれば、女官長の地位にはつけるはずだろうし、男の文官でも、アキより有能な人間を見たことが無いくらいだった。それに、魔力こそ少なかったが、アキが古代魔法と神聖魔法の両方が使えることをリンは知っていた。アキはそれを天性のものではなく、呪文に使う古代言語の文法や術式を徹底して学んだことの成果だと言う。

そして、今日もいつものように宮殿でアキが軽んじられるのを見て、リンは憤慨していた。

「アキは、宮殿勤めが嫌になったことはないのかい？」

「何故そう思うのですか？」

「あなたは周囲の人から軽く見られているのに腹が立たないの？」
「大切なのは、自分がどう見られるかではなく、自分が何を成すかですから。」

アキは淡々と言う。

「人目を気につけないということではありませんよ。」
アキの言うことはリンには難しかった。

武人であるジンは、舐められたら命取りだとよく言っていたからだ。

「宮殿の人たち特に殿方の多くは、わたくしを大人しくて善良で働きの女だと見ています。」

「そうだろうね。」

「だから、わたくしは人前ではそのように振る舞っているのですわ。」

「相手の求めるままに？」

「……人は、相手に自分の好む役割を押しつけ、本当の姿を見ようとしないものなのです。」

そのように見たい者には見せておけばいいということだろうか。

「わたくしは自分が何者であるか、何が出来るかを知っています。」

リンは、感心した。

「あなたは意外としたたかなんだね。」

「そうでなくては宮中みやちゆうでは生きていけませんわ。」

アキは品のある顔でにこりと微笑んだ。

宮廷の落とし子 4 (前書き)

性的な描写が有ります。

宮廷の落とし子 4

しばらくして、その毒物の知識と武術の能力の高さが見込まれ、皇太子の従者を辞し側仕えの毒味役として後宮へと上がるように、皇太子の親代わりであるユイ准太后から誘われた。

「お前のことはよく知っておるぞ。皇太子の毒味役兼護衛として側に付いておくれ。いずれ時がくれば、我が側近としての役目を与えよう。」

リンは、男の自分が後宮に上がるこの意味を知っていた。この国には数は少ないものの宦官がいたのである。ぶよぶよと太った甲高い声の男らを思い出し、リンは脂汗が出るようだった。

ろくに役に立っていないとは言え、自分の一部を切り取られるなんてご免だ。

「そのことなら心配ない。お前にその機能がないことは存じておる。」

リンは核心をつかれて仰天した。いままで誰にも言ったことは無い。知っているのは、リンが男娼として働き始める時に自分にその方法教えたあの男だけのはずだった。いつの間にかそこまで調べ上げられているのだろうか。

「それに、後宮には若い妃も側女も今は居らんから、そこまで堅苦しく決まりを守ることはないであろう。」

皇太子はユイとともに後宮で暮らしていたが、皇太子の妃は離宮を与えられており、時たま皇太子がそこに通っていた。

「何故、俺にそこまで求めるのですか。」

「わらわにとつてお前は格別の存在なのじゃ。理由はいずれわかるう。それに、お前がこの話を受けてくれれば、皇太子が即位したあかつきには中将^{ジン}の出世も思うままじゃぞ。」

「……ジンに相談します。」

リンから後宮勤めのことを聞き、ジンは苦い思いだった。

「分かってて言ってるのか？」

「別に、宦官になるわけじゃない。」

だとしても、魔窟と陰で呼ばれる宮殿の中でも最も陰謀や策略が渦巻く後宮に住み込むことは、リンの身をますます危うくする。その後も武人や文官としての真つ当な出世の道は閉ざされるだろう。

もしや、自分の出世のために、リンは無理しているのではないか。「そこまでの恩義をあなたに感じてるわけじゃないよ。自分を買いかぶり過ぎだ。」

リンは嘲笑った。

「あんたが俺を後継として期待してるのは知ってたけど、俺には、正常な男性機能がない。最初から人並みの人生なんておくれやしな
いのさ。」

ジンは驚いた。

「それに、皇太子の従者よりあの女の側近の方が面白そうで、後々に権力を握れそうだからね。」

それがリンの強がりなのか本心なのかわからないまま、ジンは承諾の返事をユイに届けた。

その条件として、ジンはある老齢の忠実な使用人をリンの宮殿内での従僕として付き添わせることにした。ジンの家に居候を始めた当初からリンを殊の外可愛がっている男で、いざという時にリンの守りになるかもしれないなかった。

ユイには何か別の考えが有るのだろうか、リンは後宮にいながら、皇太子や今上帝の寢所に侍ることは無かった。

後宮に住み込むようになってしばらくは毒味役として常に皇太子の側に付いていたが、やがて転機が訪れた。ユイが皇太子の護衛をさらに幾人か雇い入れたことでリンに多少の時間の余裕ができ、後宮からの外出を許された頃であった。

宰相が連れてきた例の専門家は、これまでも折りを見てリンに謀報術や暗殺術、暗器の使い方や術の破り方などを教えてきてはいたが、ある時リンに告げた。

「おまえに欠けている技術が一つある。儂では教えられんから、覚える気なら別に師を付けることになるが、どうする？」

「その術がないと俺が宮中みやちゆうで生きるのに不都合なんだろう？ ならば覚えるしかないさ。」

それは人心を掌握し謀報や懐柔を滞り無く遂行するのに不可欠な、わや閨での術のことであった。男娼として働くにあたって多少は躡けられていたが、それでは閨房術とは呼べない。

リンは、その行為に対して何のこだわりも持っていなかったため、特に深く考えずに了承した。

リンに閨房術を教える師というのは、偶然と言っているのかわからないが、最初にリンに男娼としての振る舞いを仕込んだナギという名の色事師だった。彼は幻術と癒しの魔法の使い手で、娼館に売る娼婦らを仕込んだり、請われて閨房術を教えたりしている暗黒街の人間である。

彼は年若い男娼を躡ける時、まずは念入りに、自らの身体を痛めずに受け入れるための方法を学ばせる。相手のなすがままに欲望をぶつけられては、早々に身体を壊し使い物にならなくなるからだ。

また、従順な様に見せかけて相手の欲望を巧く操り、乱暴に振る舞わせないような手管を教えた。そのおかげで、ナギの仕込んだ男娼は扱い易い上に長持ちすると評判だった。

「久しいな。一年ぶりか。」

「あんに再び会うことになるとは思わなかったよ。」

「お前にもう一度あれを仕込めるなんざ、光栄だな。不能は治ったのか。」

「残念ながらそっちの方は全く。」

「ふん。あつたに越したことはないが、まあ、お前の場合には無くても大丈夫だろう。」

宮殿で指導するのは憚られるため、この師匠の所には数日おきに通った。

ナギはリンに口や手を使用した奉仕の技の他に、男の心を惹き付け籠絡するための極意を教えた。

リンは受け入れることに多少は慣れ、愛撫にはそれなりの心地よさを感じるようにはなったが、男性部分はやはり全く機能することがない。

ナギの熟練の技だろうが、女を充てがわれようが、どのような刺激によっても快感を得ることはなかった。

「不感なのはお前の欠陥だが、それは強みにもなる。」

ナギは、リンをさんざん弄びながら言った。

閨房術の肝は、相手に気があると思わせる絶妙な駆け引きにある。男の身体は素直で、快感を得た振りをすることは難しい。最初から何も感応しないリンの身体は、かえってそれを偽ることも容易かった。

だがナギの言うことはそれとは異なった。

「偽りの嬌声や快感の言葉など口にするな。そんな誤魔化しはお前に必要ない。」

何も求めない身体だからこそ、相手を夢中にさせるのだと。

「まあ、明らかに格下の相手にはたまには聞かせて煽っても良いが。」

「彼はリンに、それよりもその行為の際に相手から目を逸らさぬように、と言う。」

「相手の目を真っ直ぐに見ながら、微笑んでやれ。」
受け入れながら目を逸らさずにいるのは難しい技術だとリンは思った。だが、快楽に揺さぶられない自分なら出来るだろう。

「お前の目には不思議な力がある。」
ナギはリンの目をじっと覗き込みながら呟いた。
「その瞳に見つめられて心をかき乱されない者はいないぐらいにな。」

身体の成長にあわせた数か月の指導の後、リンは、師にその術を認められて合格となった。そして、ラザ皇国の色街に受け継がれているという、閨房の秘法を伝授された。

リンのこの欠陥には、ある秘密が関わっている。

リンは13歳（便宜上の年齢だが）のある日、育ての親のナナを抱いてしまった。ナナから狂おしい思いを告げられてのことであった。

その直後、リンは原因不明の高熱で三日間昏睡した。ナナは死に、リンが目覚めた時には葬儀が終わっていた。

ナナの同僚らは、ナナが自分が育てた息子のような存在であるリンに恋心を抱いているのを知っていた。ナナは自らの業に耐えられきれずに自殺したのかもしれない、リンを道連れにしようとして果たせなかったのかもしれないと考えていた。

そしてリンは、それつきり性的不能に陥ったのである。精神的なものなのか、薬か何かを盛られたのかは分からない。

そのことによる外見的な影響は特に無く、背は順調に伸び、しな

やかで美しく少年らしい体躯へと成長していった。

15歳になる少し前に遅めの変声期を迎えた。リンの美声は一時失われ、ますます無口になった。

もうずいぶん歌っていないな、とリンは思った。

ナナの形見の豎琴も、心なしか光を失っているようだ。

ナナを抱いた夜、彼女との最後の会話を思い出す。

「あなたは生きて。」

どんな状況で言われた言葉なのかはもう忘れてしまった。行為の記憶すら断片的にしかない。

あの時には自分を遺してナナが死ぬなんて、思いもよらなかったというのに。

宮廷の落とし子 5 (前書き)

性的な描写が有ります。

その年、ラザ皇国に未曾有の災害が起きた。大洪水で多くの田畑が押し流され、備蓄された食料が底をついた。ラザ皇国は島国であり、また強硬な鎖国をしているため、隣国からの物資に期待することも出来ない。

そして、外交上で常に重要な関係を持つハザルム王国から使者が来た。この国はラザ皇国と大陸を結ぶ玄関口にあたり、ラザに常日頃より開国を迫っている。

人道上という言葉をも盾にし、ハザルムに一方的に有利となる条件での国交が支援の条件であった。

死病の床にいた今上帝の代理として、次期の帝である皇太子とその後見である宰相とユイが使者の応対をする。

「お前にひと働きして貰おう。」

「……………もとより、覚悟はしている。」

その夜、リンはユイの指示により、ハザルムの使者の部屋を訪れた。そこでリンはあらん限りの技をもって使者をもてなした。例の閨房の秘法も使用したそれは、三日三晩続いて使者を骨抜きにした。

ハザルムの使者が帰国する時、使者は当初迫った条件のほとんどを手放す一方で物資の支援をラザに書面で約束させられた。ラザ皇国側からは、今後もハザルムからの使者を受け入れ、宮殿をあげて歓待（リンによる特別な『もてなし』を含む）し、国交について話し合うということだけをとり付けて、無能な使者は帰っていった。

リンの次の務めは、皇太子の地位を揺るぎなくするため、ラザ皇国内で発言力のある内務大臣と軍の最高司令官を籠絡することであった。その際に、ユイはこの男らを陥落するためのちよつとした肝

所を伝授した。そしてリンは、見事に男娼あがりの恥知らずな少年を演じてみせた。

内務大臣は金持ちだったので、リンに端金を握らせて宰相やユイの情報を聞き出そうとした。リンは喜んで秘密（むろん虚偽にきまつているが）を漏らした。行為の代償としてたわいなく小金をせびるリンに、内務大臣は嘲りながらも男娼には多すぎるほどの額を与えた。リンのことを、高くはつくが金でどうとでもなる者だと思つたようだ。

軍の最高司令官である元帥は、美丈夫で身体に自身があるようだった。リンは男狂いゆえに性的不能に陥つた男娼の振りをした。リンは、恩知らずにも元帥との情事に夢中になるあまり自分を捨つたジンを侮蔑する言葉を、寝物語で口にした（演技なのは言うまでもない）。これは元帥の優越感を充分に刺激した。

二人は、自分がリンの特別な存在だと信じ込み、リンに吹き込まれるがままに宰相やジンを軽蔑し、時がくればこの国もリンも手中に収めることができると思つていた。

リンは次第に、この宮殿の闇に吞まれそうになつていった。

ジンは、本来なら政治的権力を持つ大人達がすべき駆け引きをリンがその身に背負っているのを知つて激しく動揺した。交渉の目的はジンからしても利に適うことであつたが、リンのような少年を利用することは許し難かつた。

ジンが老従僕に促されて久しぶりに宮殿で会つたリンは、変わり果てていた。黒髪は伸びて艶やかに肩にかかり、日焼けしていない肌は透き通るような薄い象牙色だ。唇は赤くなまめかしく、長いまつげに縁取られた黒い瞳は物憂げに遠くに視線を送っている。その病的な美しさに、ジンは啞然とした。

その表情には翳りが見え、口元はいつも冷たい笑みを浮かべてい

る。

「お前……………」

ジンは、本当にこれで良かったのか、深く悩んだ。今すぐリンを取り戻すべきではないか。だが、一年間を一緒に過ごしただけの自分に何の権利があるというのだろう。自分もまたリンを利用しようとする汚い大人に過ぎないのであるという思いが付き纏い、ジンを躊躇させた。

リンは、ジンに冷たくにこやかに笑いかけた。

「後宮は、退屈している暇もないよ。」

リンが嫌だと言ったなら、ジンはすぐさま連れ戻しただろう。しかし、政治的駆け引きの道具にされても特に感情を面に浮かべることも無く、薄く笑っているだけだった。

「俺はただ、自分の役目をこなしているだけだ。」

「お前がそれで良いなら、俺には何も言えない。だが、強いられてやっているなら無理するな。」

「本当に俺は、男と寝ることなんて何とも思っていないんだ。」

今上帝が病に倒れてからというもの、不審な事件がいくつあった。

皇太子が刺客に襲われた。リンが側に付いておりすぐに賊を捕らえたため、大事にはいたらなかった。だが、ある高官が皇太子の命を狙った首謀者として処罰され、その娘である側室の一人が後宮を追われた。この側室はユイより身分が高く、帝の寵愛を殊の外受けていた。側室は身ごもっていたが子は流れたと噂された。これは世間を騒がせ、帝の心を憔悴させた。

高官を処刑した後も、皇太子は再び襲撃された。リンは傷を負い

ながらも賊を討ち取った。女暗殺者が侍女として後宮に入り込んでいたのだ。犯人は、皇太子反対派の誰かだと目星はついた。皇位継承権を巡っての争いである。後宮にまで手を回せるとなると、いよいよ危険だ。

そしてある日、皇位継承権二位だった先帝の息子、今上帝にとつては甥が、原因不明の熱病で亡くなった。もともと持病があったため、そのせいで発症したとされた。

帝の甥は、亡くなる数日前に宮殿で皇太子らと酒席を共にし、そこにはリンも侍っていた。リンが言うには、その時の彼に特段変わった様子は無かったそうだ。同じ物を口にしたはずの皇太子には全く異変はない。

「妙な毒でも盛られたのかもね。」
リンはぼつりと呟いた。

ただ一人だけを狙い、数日の時をおいて殺すことが可能な毒薬などラザ皇国内では聞いたことがなかった。あるいは、複数の薬や毒物を組み合わせる使用する方法が、大陸の何処かにあるのかもしれないが。

それからすぐに、宰相と政治的に対立していた内務大臣が、何者かに暗殺された。

内務大臣は貧民街にもほど近い、ある待合宿で見つけた。人目を憚るような相手と逢引きの約束でもしていたのだろうか、護衛を途中で置いて単独で行動していたという。宿の人間が言うには内務大臣は一人で部屋に入ったようだ。その後、黒髪の美しい娼婦らしき女が部屋に入って行き、しばらくして出て行ったらしい。そして内務大臣は変わり果てた姿で発見された。黒髪の娼婦の正体については、ラザ皇國中の娼館に面通しをしたが、当てはまる者はいなかったという。

ジンはこれらの不可解な事件を聞き、ある仮定が思い浮かんだが、

それを強いて否定した。そしてなんらかの政治的な力が働き、詳しい捜査は行われなまま迷宮入りした。

間もなく帝は崩御し、皇太子が16歳の若さで即位した。

リンは側仕えの任を解かれ、後宮から一応は解放された。これからは宰相やユイの言うがままに、宮殿の暗黒面を担うことになるだろう。

ユイは帝の母親役として准太后の位を授かり、正式な後見人となった。宰相は若い帝を補佐する役として、国一番の権力を誇っている。ジンもまた、ラザ皇国随一の武人として名を上げ、海軍の提督として軍部では最高司令官に次ぐ地位に就いた。

程なく、宰相とユイ准太后は対立した。ハザルム王国とラザに有利な条件で交易することで利を得たい宰相と、頑に鎖国に拘るユイ。やがて、政界は二つの勢力に分かれた。表立った争いは無かったが、水面下では熾烈な戦いが始まるうとしていた。

宮廷の落とし子 6 (前書き)

残酷な描写が有ります。性的な描写が有ります。

宮廷の落とし子 6

リンは閨房術の師匠であるナギの所にまだ通っていた。

閨房術自体はすでに習得済みだが、拷問に耐えるための鍛錬を引き続きナギから受けている。

後宮に出入りする身としては、誘拐や拷問などに遭って秘密を漏らしてしまうことは避けねばならない。それに、あの毒を飲まされて苦しんだ日のことは、未だにリンの心に禍根を残していた。苦痛に支配されないことはリンの切なる願いだったのである。

彼は幻術を駆使し、リンの身体に消えない傷を付けるようなこと無く、効果的に苦痛を与えていった。リンは生まれつき感受性が高いのか幻術がよく効く体質だった。特にかけられ慣れているからか、ナギの幻術はリンの精神を容易く侵す。ナギがリンに付けた傷は皮膚一枚を切る程度だったが、幻の中のリンは、巨大な獣に生きながら四肢を喰われているはずだ。

リンは幻術の苦痛と恐怖に取り憑かれているようで、目の焦点が合わない。

「苦痛をこらえるのではない。」

ナギは血を流しながら苦悶の呻き声を押し殺すリンに、静かにそう言った。

「痛い、ではなく、痛みを感じている自分がある、というように変換するんだ。」

そうすれば苦痛を制御することができ、徒な恐怖は消えるという。リンはやがてその意味を理解し、自らの身に起こる堪え難い精神的・肉体的苦痛を、共に在るものとして静かに受け入れていく。

自らの意識の一部が切り離されたように、苦痛から自由になる。苦痛を感じる自分と、そう思考する自分がびったりと寄り添うのを

感じる。

「どんな目に遭おうとも、絶望するな。絶望は死を近づけるだけだ。」
「リンに身体をばらばらに切り裂かれたような絶望的な幻を見せた後でナギは言った。

「たとえ、目鼻を抉られ、手足をもがれたとしても、生き延びる。」
「何故……?」

「お前は強く、賢い。目は見えず手足を失ったとしても、生きてさえいれば勝機はある。」

「遠い異国には失った身体の一部を再生する奇跡の秘薬さえ存在する」という。

「そこまでして生きて、何をするといいんだ?」

「ナギは少し考えてから言った。

「……復讐しろ。お前を踏みにじった全ての奴を殺すまでは、死ぬな。」

「俺に、そんなこと出来るかな。」

「出来るさ。お前だけは、何があっても生きてくれ。」

「リンが鬼気迫った表情になったのを見て、ナギは笑う。

「お前には、その類希な美しさという武器がある。俺が教えた閨房術を使えば、まずそんな目には遭わないだろう。」

「こうしてリンは、どんな苦痛にも恐怖せず、どんな暴力にも支配されず、また、どんな状況におかれても絶望しない、強靱な心を作り上げていった。

「しかし、この不自然な鍛錬は、後々リンの心に癒え難い傷を残すことになるのだった。」

「ナギは、拷問の訓練で付けたリンの傷を癒すと優しく抱き始めた。

愛の言葉をささやき、慈しむように愛撫していく。そのまるで恋人のような甘い行為に、リンはあっさり陶醉してしまう。

「不感のお前には、このような行為は効果がないはずなんだがな。」
微かな心地よさ以上は感じない身体とは裏腹に、リンの心は感じ易かった。一時の熱い感情に身を任せるのは、抗いがたい精神的快楽だったのだ。熱に浮かされたような顔をするリンに、ナギは苦笑した。愛のささやきも優しい行為も、リンを揺さぶるための偽りなのだろう。

「惚れてもいなくせに、甘い言葉に自分を見失うのはお前の弱点だ。覚えておけ。」

「この感情を制御するにはどうしたらいいの？」

「……俺には教えられん。」

リンは、ナギに奨められて豎琴と歌の練習を再開した。

「持てる技は多い方が良い。それに、お前の育ての親は豎琴や歌をそれは上手に利用していたぞ。」

「ナナが？」

彼女が客の心を惹くために伎芸を利用していたと聞き、リンは得心した。

心配していた声変わりの件は、杞憂に終わった。今までの愛らしい少年の声では歌えなくなっていたが、発声を工夫することでこれまで以上の音域と艶のある声で歌えるようになったのだ。

ユイや宰相に指示されて、宮殿で皇族や高官相手に豎琴の演奏や歌を披露する機会も多くなった。リンの歌を耳にした者は、ほぼ例外無く心をとろかさされた。リンの類希な美声と豎琴の技、そしてその神秘的な美しさに人々は驚嘆の意を込め、この少年を『宮殿の至宝』と呼ぶ。

リンに特別な想いを抱く者は、男女問わず多かった。後宮の中では表立った行動を取るものは少なかったが、自由の身になったとたん、言い寄るものは引きも切らなくなった。侍女に手紙や物を渡されることもある。手紙に心を動かされれば返事を書いたし、相手の見た目を気に入れば接吻くらいはしてやった。そして、求められればかなり激しい行為までもした。

「君は、可愛いな。」

「ああ、リン様、抱いてくださいませ……。」

リンはある凡庸な顔立ちの女官と逢瀬を重ねていた。

女は可愛い。ふわふわとしていて、自分に無いものを持っている。リンは娘の胸に顔を埋めながら、あの優しい娼婦のことを思い出していた。

このような戯れ事は性的不能のリンにとって意味の無い行為だったが、奇妙な満足感を得ていたのも事実である。

リンは男との行為もけして嫌いではなかった。性的快感を得ないだけで、肌を合わせることで得られる刹那的な温もりやその時に口にする睦言はリンを酔わせる。そこに至るまでの様々な過程も、^{フロセス}リンを興がらせた。

これらはリンにとって格好の暇つぶしだった。

「己の身を安売りしてはならぬ。」

リンの価値が下がることを恐れたのだろうか。一時の遊戯のために安易に身を任そうとするリンをユイがきつく咎めたため、ユイの指示以外で誰かと寝ることはなくなった。

世間の最底辺からリンを救い出し、才能を見いだして育てたジンのことを、悪し様に言う者は多かった。たまたま拾ったリンを後宮

に売り飛ばして出世したのだろうと思われても、ジンは肯定も否定もしなかった。事実、リンと出会わなければジンの今の立場は無かつただろう。だが、ジンはそのことを幸運だとも思っていなかった。ただ、こうなった以上は自らの役割を果たすだけだと考えていたのだ。

「お前は、俺に出会ったことで幸せになれたのか？」

「……幸せがどんなものか分からないけど、今、俺は自由だ。それだけでもあなたには感謝しているよ。」

宮廷の落とし子 7 (前書き)

残酷な描写が有ります。

リンは、宰相とユイの間では中立を保っていた。後宮の勤めは辞していたが、今上帝の名義で召されれば参内し、二人からの命令を待つ。これまで宰相とユイに相反することを指示されたことはないが、これからはどうなるか分からない。

ジンもまた、二人の間で微妙な立場であった。

「ユイを討て。」

宰相はリンにそう命令した。なるほど、後宮で完璧な守りを固めているユイを討つのに、リン以上の適任は居るまい。

だが、リンはあくまでも帝の配下である。宰相に言われるがままに知識を付け技を磨いてきたし、いくつかの血なまぐさい事件にも関わったが、宰相の駒になっただけでは断じてない。

リンがそう言うと、宰相は目に残忍な光を込めて言った。

「私に従わぬと言うのなら、お前から悉く奪うことで支配してみせよう。それも不可能なら、死ぬだけだ。」

宰相の元を退去した後もいつまでも宰相の言葉が耳に残っていた。宰相は自分から何を奪おうとしているのだろうか。リンは自分の立場がこれまでと大きく変わろうとするのを感じ取った。

その後、リンは宰相からの再三の呼び出しにも応じずにいた。ユイの所へも行っていない。ジンが二人の間で揺れていることを知っていたので、彼にも相談できなかった。

ある日、ジンが近隣の小島に出没した海の魔物を討つために遠征した時にそれは起きた。

いつものようにナギに訓練を受けた後のことだった。

「お前は、ユイと宰相のどちらに与するつもりだ？」

突然聞かれて戸惑った。宰相からの命令の件を知っているのか。そういえば、この男は宰相からの縁続きであった。

「俺には決めかねてる。」

「いずれにせよ、お前は大きな犠牲を払うだろうな。」

リンは、彼の言葉を訝しんだ。

「一度だけ聞く。全ての役目を放棄して、ただの少年に戻らないか。俺が逃がしてやる。」

「……それは出来ない。」

「そうか。」

ナギはそれ以上何も言わなかった。

翌日、リンは覆面の黒装束の男に襲撃された。突然のことに前腕を切り付けられ、骨まで達するほどの傷を負う。リンは利き腕である左手一本で戦う不利な状況に陥ったが、落ち着いて刀を振るい、賊を返り討ちにした。襲撃の目的を聞き出すため、止めは刺さずにおく。

リンは腕の傷を確かめ、服を引き裂いた布で傷口の上部を固く縛って止血する。武器に毒が塗られていたのか、傷はどす黒く変色し始めている。この毒には覚えがあった。解毒せねば、半日で全身に毒が回り死に至る。通常の治療薬は効かない。

「……解毒薬は宰相の元にある。」

男は、それだけ言って事切れた。口内に毒を仕込んでいたようだ。死体を確認すると、リンに毒の知識と暗殺術を教えた師匠だった。

宰相の言葉を思い出す。こうやって、自分に縁の者を使って支配しようと言ったのか。そして宰相の傀儡になれと？

リンは、黒く腫れあがる腕をしばらく眺めていた。幸い、毒は肘

までしか回っていない。リンは先ほどの毒の刃と傷口を見比べ、致死量を計算する。まだ間に合う。リンは、気付けの薬草を取り出し口に含んだ。肩のすぐ下をきつく縛り、さらにぎりぎり締め上げ、結び目で血管を圧迫する。そして妖魔刀を抜くと、自らの右腕を二の腕あたりから切り落とした。骨を断つ痛みを意識が遠のきそうなのを堪える。血しぶきが飛ぶのを魔法薬で血止めする。もう一度魔法薬を口にすると、ようやく痛みが薄らぎ、意識がしっかりしてくる。歩き出すと、身体の片側が軽くなった慣れない感覚にふらついた。

腕なんてくれてやる。自分は宰相には支配されない。だが、何があっても生きる。

……復讐するために。

片腕でどこまで戦えるか分からないが、リンの出した答えはそれだった。

ある予感がして懐かしい娼館へと急ぐ。やはり不安は的中し、そこは血の海だった。黒装束の集団が娼婦や下男らに斬り掛かっており、瀕死の者、既に息絶えた者もいる。宰相は自分をこつやっつけて追いつめていくのか。胸がきりきりと痛む。強い怒りが沸き起こるが、かつてのジンの言葉を思い出し、感情には翻弄されず、冷静に襲撃者を見つめる。

リンは手練の男たち複数に囲まれた。リンは縄をかけて捕縛しようとするのに抵抗し、妖魔刀を手にする。賊らは、リンを捕らえられない時には殺害するように命じられているのか、さらに武器を手にして襲いかかってきた。複数を相手に、片手では戦いきれない。

突如、妖魔刀が不思議な光を放ち始めた。リンは妖魔刀に半ば引きずられるように、周囲の男らに猛烈な速さで斬りかかっていく。黒装束の者らが全員動かなくなった所で妖魔刀は動きを止めた。

腕に受けた毒のなごりと失った血の量に目眩を起こす。さすがにしばらくは動けず壁にもたれてみると、ナギの声が幻術を使って頭に響いてきた。

『お前の大切な者を預かっている。ユイの首と引き換えよう。』
栗色の髪の毛勝ちな少女、ミヤの姿が無いことに気付き、リンは満身創痍でただ呆然となった。

リンは宮殿に急いで駆け戻る。後宮の入口で、全てを知っているかのようにユイは待っていた。

「お前にはわらわは討てぬ。」

「……そんなことは分かっている。」

「あの色事師を殺すことも、今のままのお前ではできんだろうな。」

ユイは、妖しく目を光らせてリンを見つめる。

「力が欲しいか？」

リンは、自分の無力さを痛感し、親しい人々を巻き込んだことを痛烈に悔やんでいた。

自分に、彼らを守るような強い力があれば。

「わらわと取引せよ。」

ユイの出した条件は、リンを躊躇させた。

ユイに服従すること。ただし、リンの身体をむやみに傷付けるような命令は出さない。

このことさえ了承するなら、ユイの持てる限りの妖力を注ぎ、失った腕を取り戻して一騎当千の力を与えると。また、どんな幻術や呪いも効かず、傷を受けてもすぐに癒え、老いることの無い肉体に生まれ変わらせようと。

「さすがに、わらわの力でも不死にしてやるのは無理だが。」

リンは不老不死などに興味は無かったが、剣を振るうための腕は取り戻したかったし、幻術の効かない身体には強く惹かれた。

だが、その身体と能力を得るための代償として、魔力を持つ男と交わることでそれを吸収し、力に変換しなくてはならないという。男と交わり続けなければならないこと、リンはそれ自体はさして問題にしなかった。

「それとも、懐かしい者らを失い、片腕も失い、抜け殻として生きるか？」

「俺は、誰にも支配されたくないんだ。」

「あの少女を見殺しにする気かえ？」

「……………」

「宰相との件はわらわが片を付ける。二度とお前の縁の者らに手出しはさせぬよ。」

ユイは優しく言った。

思えば、この時に既にユイの術中に嵌まっていたのだろう。愚かにも、リンはこの非道な条件でユイと契約した。

ユイは黒く光る石の指輪を取り出すと言った。

「これは、わらわとお前の契約の証。どちらかが死なぬ限り、外れることは無い。」

指輪が輝きを増し、空中をふわふわと浮いてリンの目の前で止まる。

あるはずのない右腕に激痛が走り、リンは気を失った。

宮廷の落とし子 8 (前書き)

残酷な描写が有ります。性的な描写が有ります。

宮廷の落とし子 8

リンが目覚めた時ユイの姿は無く、リンに傷一つない右腕が戻っていた。中指にはあの黒い指輪が填まっている。リンは、自分の身体がこれまでに無く軽く、力強いことに気付く。

そして、ミヤが囚われているナギの元へとリンは走った。

一方、拉致されたミヤは、自分達の身に起きた出来事に恐怖すると同時に、自分の変化に戸惑っていた。

娼婦達が襲われた瞬間、ミヤは自分から怒りとともに強大な魔力が溢れるのを感じた。その力は、制御さえできればこんな幻術使いなどに攫われたりしないほどのものだったのだが、ミヤはそれに翻弄され、押し流されてしまった。

「お前には強い光の力があるな。ここで死なすのは惜しいもんだ。」
ミヤに魔力を封じるための呪符を貼りながらナギは言った。

自分に、この力さえ操れば。ミヤは無力感を痛烈に感じていた。

そこへリンが現れた。

「よう、きたか。」

リンがユイを討ってきたのではないことは分かっている。そして、リンの纏う力が通常あり得ないものだということも感じ取っていた。
「では、戦^やろうか。」

短い戦闘の後、その場に立っていたのは妖魔刀を手にしたリンだった。幻術と癒しの魔法使いであるナギは、幻術の効かない身体に生まれ変わったリンに敵う相手ではなかった。

ナギの死に顔は安らかだった。リンは、その頬にそっと唇を押しあてた。

ナギは、自分に殺されることが分かっている、ミヤを拉致したのではないか。彼はリンが生きるのに必要な様々なことを教えてくれた師であり、思えばリンの初めての男でもあった。

そして、あの日リンにささやいた愛の言葉は本当に偽りだったのだろうか。ナギはリンに、どんなことがあっても生きると言った。そう言いながらも自分はリンに殺されることを選んだのだ。宰相に逆らえない立場と、リンへの思いに挟まれた彼の選択肢は一つしかなかったのだろうか。

リンは少し感傷的になったが、涙は出なかった。

リンがナギを殺した瞬間、ナギのかけた術が解け、ミヤの身体からまばゆい光が溢れた。

拘束が解けたミヤはリンの元に歩いて来る。

「君のその力は……。」

ミヤもまた、リンの変化に気付いていた。

「私のせいで、リンに取り返しをつかないことをさせたんじゃないかしら。」

「そんなわけ無いだろ。俺があいつらを殺せるような力が欲しかっただけだよ。」

ミヤはユイとの契約の内容には気付いていない。ミヤは知らなくていい。

「君には、光の魔力があつたんだね。これで、俺が守る必要は無くなつた。」

「最初から、あんななんか守られたりしてないわ……。」

リンは、安堵とともに、深く脱力した。

リンは、遠征から帰ってきたジンに事の次第を説明した。さすがにこの短慮にもほどがある契約について、激怒され呆れ返られた。ジンの決意も固まった。実を言うと宰相側に傾いていたのだが、リンを人質に取られたも同然の状況で、ユイに加担しないわけにはいかない。

宰相は最高司令官と組んだようだ。もうすぐ国を二分しての決戦が始まるだろう。

ミヤはジンが身請けして、ある高名な光の神聖魔術師のところに残けた。この少女は、もともとハザルム辺りから攫われ、ラザ皇国の娼館に売られてきていたらしい。ラザには少ない鳶色の瞳をしているのも頷けた。

「リンが頼りないから、私が強くならないといけないじゃない。修行して力をつけたら、きつとあんたの所に戻ってくるわ。」

少女はリンにそう言って旅立っていった。

数日後、つかの間の平和を味わっていたリンはユイに呼ばれて次の指令を出された。

「大陸には迷宮が数多く有るのを知っておろう。」

ユイの命令は、迷宮に存在する力の源である『迷宮の核』を集めることだった。

「俺は、この国から出るということか？」

「そうじゃ。不服か？」

ユイはリンに、冒険者の持つIDカードと特殊収納ポーチを渡した。この特殊収納は、冒険者だけが持つことが出来る特別な魔法具で、アイテムや装備品を瞬時に取り出すことが出来る。

ラザ皇国には冒険者ギルドがある。リンが旅に出るにあたっては、

ラザ王国での身分を隠して冒険者登録を済ませたのだった。リンの外見や技能、魔力補給の件などを考慮すると、『吟遊詩人』として旅をするのが一番良いと言う。

そして、いくつかの強力な魔法具を与えてリンを激励した。

「今のお前の力なら、必ずや果たせるはず。期待しておるぞ。」

リンは、信じられない思いだった。ラザの地で一生ユイの籠の鳥として飼われる運命だと半ば諦めていたのに。

「急ぐ事柄ではないため、期限は設けぬ。ただし、指輪の契約のことを忘れるでないぞよ。」

ジンはリンの残りの装備や路銀を整えてやった。明日出航の船便で立ち、まずはハザルム王国から西の砂漠へと向かう手はずだ。

「お前はもうラザ（ラザ）に帰ってくるな。」

「息子に対して酷い言いようだね。」

「……ああ、お前は勘当だ。」

ジンは冗談めかして言ったが、リンは胸が詰まりそうになった。

リンは、ジンの逞しい背中に腕をまわし、その目を見つめて言った。

「もう息子じゃないなら、最後に一つだけ、俺の頼みを聞いて欲しい。」

リンは、例の魔力を得る手段のことを簡潔にジンに説明し、船出の前に補給したいのだと言った。ジンは躊躇ったが、やがて思い詰めたような表情でリンに口付けた。

二人は、二度と会うことが無いかもしれない寂しさとこれまでの色々な思いが交錯する中で、激しく抱き合った。

「俺はお前が可愛い。初めて会った時からずっとだ。」

うわごとのようにジンが言うのをリンは夢見心地で聞いていた。

ジンが登りつめた時、リンは自分の身体に魔力が流れ込む初めて

の感覚を味わっていた。ジンは剣士でありながら水の癒しの精霊魔法が使えたのだ。その穏やかで甘美な感覚にリンは満たされ、恍惚となった。

ジンは魔力が吸い取られて空になったのを感じながら、リンの今後の旅路で待ち受ける因果な行為について想像し、ため息をついた。

「見送りは要らない。」

翌朝、旅の支度をしながらリンは言った。

そして、ジンに軽く口付け、足早に出て行った。

港には出航の少し前に到着した。

大陸からの風が吹いている。リンは豎琴を取り出すと、風に髪をなびかせながら歌った。

故郷ふるさとの島は遠く

島影も今は見えない

島々から届く風は

懐かしき香かを孕む

我ら海に行く 新しい地を求めて

我が旅路は 鳥のように

我が願い 風のように

これからどのような旅路が待ち受けているのだろうか。リンはただ見ぬ海の向こうの大陸に思いを馳せた。

宮廷の落とし子 8 (後書き)

これで第二章は終わりです。

ムーンライトノベルズに連載中の本編に戻ります。

今後はこちらにも2〜3日に一度更新します。

本編はR18ですのでお気をつけください。

タイトル「旅と精霊と大地の歌」

Nコード N8096X

活動報告に元ネタ的な事を書いていますのでよろしければどうぞ。
感想もお待ちしています。

パート 1 (前書き)

性的な描写があります。

パート 1

初めてアルダリウス様にお会いしたのは、あのお方がまだほんの赤子の頃であった。

私は下流貴族の末裔である学者の長男で、大勢の弟と妹の面倒を幼い頃から見ていた。出世に興味など無い父親と、おっとりした母親のもとで、家の事を手伝う傍ら、苦勞しながらも勉学を修めた。

そんな私を支えてくださったのは、伯爵家の奥方で高名な魔術師であるロザリー様だった。私のような者を見いだすのがお好きらしく、彼女の庇護下で勉学や魔法、武術を学ぶものは多かった。貧乏学者の息子に過ぎない私は、いくら優秀だろうと、教師ぐらいしか職がなかった。教師の養成所で学んでいた時、ロザリー様にお声をかけていただいたのだ。

しばらく私の学費を援助してくださったお陰で、私は苦しい家計を顧みること無く、月謝が高額なために諦めていた政治学や経営学、謀報術などを学ぶことができた。20歳で全ての課程を優秀な成績で卒業し、しばらくは中流貴族の家庭教師を点々としていた。

そして、私の人生に転機が訪れた。5つ年下の妹が19歳で嫁ぎ、一番年少の弟を無事に建築師の見習いに出してからと言うもの、私はいわゆる燃え尽き症候群になっていた。今まで家族のために熱心に働いていたのだが、その重しがなくなり自由になったとたん、生きる意味を見失ってしまったのだ。教師として仕える貴族の子弟らは悉くぼんくらで、教える張り合いも無かった。

そんなある日、ロザリー様にウィルド家にお呼びいただいて、神の奇跡のような愛らしいお子らに引き合わせていただいたのだった。

「あなたは子ども達の世話も得意と聞いています。この子達の守役兼教師として、末永く勤めてくれないかしら。」
私は是も非も無く承諾した。

私がウィルド家にお仕えするようになってから程なくして、伯爵が亡くなられた。伯爵のご長男であるエリオス様が順当にその後を継がれ、世界神殿を守護する聖騎士団の長も兼ねられた。

ロザリー様は伯爵家を離れ、世界神殿の本拠地である聖都のほど近くに居を移された。

兄のシルベリウス様は、お父上であるエリオス様によく似ていらつしやつた。太陽神の加護を受け光の精霊にも愛されているだろう輝くようなお姿だつた。聡明なお子で、私がお教えること全てを正しく理解し、飲み込み、知識を貯えていかれた。9歳の頃には神童と呼ばれ、『世界神殿』（大陸共通の宗教である）の神職者殿と対等に議論を交わされたほどだ。忠誠心も厚く、子どもながら人を惹き付ける魅力も存在感もあり、聖騎士としての将来も期待できた。それに比べ、2歳年下のアルダリウス様はこう申し上げては何だが、見劣りがした。お祖父様である伯爵ゆずりの焦げ茶色の目と明るい茶色の髪は愛らしく少女のような顔立ちをしていたが、その瞳はいつも不安そうに潤み、シルベリウス様の服の裾を掴んでいるような、そんなお子様だつた。

私がどちらを溺愛したかは、言わずもがなであろう。シルベリウス様は私の手を煩わせることなどなかった。当時の私は、自分の庇護を必要とする者を欲していたのだつた。

だが、どのような運命の悪戯か、シルベリウス様はわずか10歳で熱病のためにお亡くなりになってしまう。

伯爵家の将来は、アルダリウス様の細い肩に重くのしかかったわ

けである。おいたわしいことであるが、私のすべきことは、アルダリウス様をどこに出しても恥ずかしくない貴族の嫡子としてご立派に育て上げることだ。私は新たな使命感に燃えた。

アルダリウス様の貴族の子弟らしからぬ振る舞いは、この頃から始まった。

聖騎士の訓練として馬に乗るのを嫌がり（馬の世話は好きならなかった）、貴族の嗜みとされる狩りを厭われ（お優しすぎるのだろう）、光の魔法の鍛錬を疎んじられた（魔法の才能が乏しかったのだ）。政治学にも全く興味を示さず、諜報術などは卑劣な手段だと話を聞くことすら拒否された（私が高い月謝を払って学んだというのに）。冒険者だった祖父様の血を受け継がれているのか、剣術に才能を発揮されたが、聖騎士の長になるには剣の腕前よりも重要なことが山ほどあった。

私は手を焼いた。口論になることも度々だった。妙に賢しいところがありで、この頃になると素直だった幼少期の面影は薄れ、私の言葉尻をとらえて言い負かされそうになることもあるくらいだった（人の気も知らないで）。私は何度も粘り強く諭し、時には叱りつけ、懐柔策も使った（私が搦め手が得意だと言われるのはひとえにこの頃の努力の賜物であろう）。

武器や装備品、特に剣がお好きなので、魔法の鍛錬も同時に積むことを条件に、その道の玄人に高額な報酬を支払って『武器鑑定』^{スキル}の特殊技能を得られるようにとり計らった。元々の知力が高いお方だったので、座学は苦手とされたが、教師を上手く選びさえすれば、勉強そのものを拒まれることは無かった。特に大陸の歴史や地理などには興味を示された（これらの教育が後々に災いを生むことになることを当時の私は知らなかった）。

私は教育係としての役目を終えた後、能力を買われてウィルド家

で引き続き働くことになった。

ロザリー様はアルダリウス様のことをそれは気にかけておられ、シルベリウス様の死後、自ら見いだした古代魔法使いの少年をアルダリウス様の陰の守役として付けられた。要するに間諜である。この少年は性格に難があるが、まあ、有能だった。ウィルド家やアルダリウス様に関わる陰謀を悉く潰し、相手を完膚なきまでに叩きのめす様は歪んでいたが、痛快だった。

特に、女性関係に関して私はある程度寛容な態度を取ろうと思っていたのだが、この間諜は許さず、近づく女性らをどんな手を使ったのか知らないが、片っ端から追い散らしていった。アルダリウス様を誘惑する女性は多かった（私の見込んだお方だから当然と言えば当然だが）。よくもまあ、アルダリウス様に気付かれなかったものだ（あの方は元々鈍い所があたりだ）。

ああ、どんな手を使ったか知らないと言ったが、私は一度だけそれを目撃したことがある。

ウィルド家主催の舞踏会の夜のこと。私がいつの間にか居なくなつたアルダリウス様を探していた時である。

あの変態ときたら、よりによつてウィルド家の敷地の外れで、とある令嬢と本番行為に及んでいたのだ。頭がおかしくなつたのではないか。

「あなたは、服も脱がずに獣のようにまぐわうんですね。」

娘が立ち去つたのを見届けてから、例の間諜が庭木の陰から出てきた。顔を半分隠しており、どこで調達したのか北方貴族のような変装だ。舞踏会に潜り込んでいたのだろうか。私は不覚にも気付かなかつた。

「どこの世界に、人んちの庭で素っ裸になる馬鹿が居るんだ。」

「どこの世界に、人んちの庭で事に及ぶ阿呆が居るんですか。」

私は怒りを通り越して呆れた。

「見られたら見られたで、俺の方はほんの少しも構わないからな。」

先ほどの令嬢を思い出した。 舞踏会の会場で、アルダリウス様に執拗に言い寄っていた下級貴族の娘だ。

「そう言うことですか。」

私はこの破廉恥な閻謀と顔を見合わせてにやりとした。

「もう少し場所は選んで欲しいですが。」

「舞踏会を抜け出してこんな所に来るのは、あんたとお坊ちゃんくらいだよ。」

アルダリウス様が目撃することも考慮していたとは、そら恐ろしい。 あの方に変態が伝染^{うつ}したらどうするのだ。

「舞踏会の様子を見てたけど、ありゃ、どうしようもないな。」

アルダリウス様がダンスを申し込まれるたびに真っ赤になってしどろもどろになったことを言っているのだろう。

「そろそろ例の教育も開始した方が良いんじゃないか？」

「アルダリウス様にはまだ早すぎます。」

「そうかなあ。遅咲きの方がやばいって聞くけど。」

「あなたの口出しすることではない。」

「過保護っぷりは健在だな。言ってることに矛盾がある。」

あなたにだけは言われたくないと言おうとした瞬間、辺りが眩しい光で包まれ、気付いた時には頭のおかしい閻謀は姿を消していた。

パート 1 (後書き)

予定を変更して、二人を取り巻く人々の話を閑話として時々掲載することになりました。次回は「パート 2」。今週水曜日に掲載予定です。

パート 2

あの下級貴族の娘はやはりあわよくば伯爵家の妾にでもなろうという、ろくでもない売女だったことがわかった。どおりで北方貴族のなりをしたあの間諜にころつと騙された訳だ。良家の子女ならば、いくら言葉巧みに誘われようが相手がどんな美貌の持ち主だろうが、会ったばかりの相手と屋外であのようなふしだら極まりない行為をするはずがない。

私やロザリー様の努力の甲斐あって、ようやく人並みに見られるようになった頃、伯爵と聖騎士団は、皇帝の命により北の大地に巣食う魔物を討伐するための遠征に出られた。そして、二度と戻ることは無かった。

有能なだけでなく、ウィルド家の事情や領地に一番詳しくかった私は、ウィルド家の家宰となり、伯爵が担っていた役割の半分を引き受けた。伯爵の役目は、表向きは伯爵の弟（能力はないが善人である）が代行することになった。聖騎士団のことはロザリー様が見てくださいという。

思えば、アルダリウス様の態度はどこがおかしかった。しかし、愚かにも私はウィルド家を取り巻く政治的な駆け引きや陰謀の解決に奔走しており、あの方のお心をな蔑ろにしまっていたのだ。そして、ある日、姿の見えないアルダリウス様をお部屋に呼びにいくと、机に二通の封書が置かれていた。一通は私宛だった。

『これまで実の兄のように面倒を見てくれて感謝している。私は自分の力を試したい。探さないでくれ。』

稚拙な筆跡で書かれているそれを読み、私の手は震えた。なんということだろう。家出とは幼稚にもほどがある。

もう一通はロザリー様宛てだったので、自ら早馬を飛ばして届けに行った（私は実は馬術が得意である）。そして内容を聞かせてくれるように懇願し、封を切るのを待った。

『私もお祖父様やお祖母様の自由に自由に旅がしてみたいのです。今しか出来ないことです。気が済めば戻り、伯爵家の後を継ぎます。許してください。』

「はあ。」

「……………」

「どうでしょうか。」

「とりあえず、すぐに連れ戻すかどうかは別として、行き先を探してみてください。」

例の間諜は、間抜けにも、姿を現すなという私の言いつけを律儀に守り、旅支度をして出て行くアルダリウス様をそのまま見送ったと言う。蹴り付けてやりたかったが、報復が怖い。この男は戦闘能力は低いくせに、拷問術に長けているのだ。

アルダリウス様は北に向かったようだ。そして、北の連合諸国のとある冒険者ギルドでフランクの剣士として登録をし、さらに北の地を目指しているという。まさかあの魔物と戦うつもりではないだろうな。背筋に冷たい汗が走る。

私のそのような心配は杞憂に終わり、数か月後、大草原にほど近いある国でアルダリウス様の消息が知れた。

しかし、それから私は耳を疑うようなことを聞いた。

『アルドと言う名のＢランク冒険者が大地の剣を得て地上の勇者となったらしい。』

真偽を確かめるため、ロザリー様をお願いして神殿に手を回して

もらった。

確かに、古い祠で、大地の剣を祭壇に捧げて祈る姿が目撃されていると言う。

ロザリー様はこの聞き捨てならぬ事態にようやく重い腰を上げ、自らアルダリウス様が滞在されているセガン帝国のとある街に出かけていき、事情を聞かれた。

「太陽神の加護と引き換えに、大地神と誓約した。」

アルダリウス様はそうおっしゃったという。

馬鹿か、ああ、そうだこのお方は馬鹿なのだった。

太陽神の加護が無ければ光の魔法は使えず、光の魔法が使えなければ聖騎士にはなれず、聖騎士でなければウィルド伯爵家は継げない。そんなこともわからないくらい馬鹿だったのだ。

私は頭を抱えた。そして、途方に暮れた。

思案の末、ロザリー様と打ち合わせて計画を立てた。

ロザリー様はセガン皇帝の従姉妹であり、強力な神聖魔法で帝国を救った経緯から、世界神殿にも発言力がある。

そこで、神殿に対してあるお芝居を打った。

アルダリウス様が旅に出た理由を、『父の敵討ち』だとしたのである。おそらく、アルダリウス様はそんなこと全く考えてなかったに違いない。ただ、家を継ぐのが嫌になっただけであろう。だが、帝国や神殿に対してそんな事は口が裂けても言えない。ちょうど行き先は同じ北方諸国であった。

魔物を倒すことを祈願して北方を旅するうちに、大地神に見いだされ、光の魔力と引き換えに剣と能力を与えられたという筋書きである。例の魔物には光の力では勝てないことを神殿が隠したがったのは好都合だった。アルダリウス様が太陽神の加護と光の魔力を失ったことを周囲には伏せたまま、大地神との誓約を追認させた。

太陽神には劣るが、大地神も世界神殿の重要な地位を占める今世

神である。その祝福を受けし『地上の勇者』は、神の奇跡の具現者として大切にされる。そこで、神殿はある儀式を行うことをロザリ様に持ちかけた。アルダリウス様が絶対に受け入れないだろうそれを承諾させるのは私の仕事だった。

私がアルダリウス様との取引に使用したのは、ロザリー様からお預かりしたある古の魔法具いしえだった。『古代神の念珠』と呼ばれるそれは、強力な爆発魔法が籠められている。魔法が使えず、弓も苦手なアルダリウス様は、敵が多数の時や空中や離れた所にいる魔物には難渋してきたのだという。私のちらつかせる奇跡の魔法具欲しさ
と、儀式が終わればまた自由に旅をして良いという言葉に、世界神殿で勇者祝福の儀を執り行うことを受け入れられた。

神聖な衣に身を包んだアルダリウス様は馬子にも衣装だった。神官の授ける剣を受け取るその姿に、私は不覚にも落涙してしまった。実際にはこの儀式は後付けのとんだ茶番だったし、アルダリウス様も始終視線を泳がせ、挙動不審だったが。

また、この話を美談として帝都で吟遊詩人などに語らせたので、いつしか女帝にも伝わり興がらせたようだ。爵位承継をしばらく保留とし、先の伯爵の弟を代理とする許可が下りた。

私はほっと胸を撫で下ろした。

だが、アルダリウス様の無茶は終わらなかつた。

数か月後、神託によって討伐に向かった太古の怪物を討ち取る際に、瀕死の重傷を負ったのだと言う。大地神の加護か、辛うじて命だけは助かったようだ。ようやく意識が戻った頃、知らせを聞いて駆けつけたセガン帝国の兵士達に運ばれ、領地リアスへと連れ戻された。

ひと月静養してようやく傷が癒えた頃、もう無茶な旅は止めて欲しいという私の懇願に耳を貸さず、アルダリウス様は旅に出てしまった。今度は例の間諜とは違う人間に見張らせていたので、引き止めることができた。

そして、私の目の届くハザルム王国の比較的安全な街であるザリオンを当面の旅先とすることを了承していただいた。

ザリオンに旅立っていったアルダリウス様は、しばらくの間大人しく静養されているようだった。

そして数週間たった頃、アルダリウス様の様子がおかしいと、冒険者ギルドからの連絡があったのだ。原因はどうやら得体の知れない吟遊詩人らしい。

私は現地の諜報員を雇って調べさせた。そして、報告を聞いて呆然とした。アルダリウス様が、美貌の吟遊詩人の少年と行動をともにしているのだという。その少年は酒場で歌う傍ら、男娼として客も取っているらしい。なんとという穢らわしいことだろう。

私たちが必死で守り支えた汚れなきお方が、よりによって男娼を困っているなど。何かの間違いであって欲しい。

そして、家宰としての仕事など手に付かなくなった私は、雑務を他の者に押し付け、馬を駆けさせてザリオンのほど近くの宿場に滞在することにしたのである。もともとアルダリウス様あつてのウィルド家だ。あの方がいなくては私が仕えている意味も無い。

私は、このような時に最適の人物を知っている。あの日アルダリウス様をみすみす逃がしてからと言うもの、あの男には暇を出してあつたのだが、思わぬ使いどころがあつたと言うわけだ。

そして私は例の残忍な間諜に、ある手紙を届けた。

『アルダリウス様を誑し込んだ美貌の吟遊詩人を籠絡し、アルダリウス様から引き離せ。出来なければ、せめて目的を聞き出せ。』

いくらあの間諜が美形とは言え、吟遊詩人が相手では、かつてアルダリウス様に近づいた女性たちのようにはいかないだろう。色で墮とすことには期待していない。だが、あの男には古代魔法の尋問術がある。少年の意図を聞き出すことくらいは朝飯前のはずだ。

さて、どう出ることやら。

パート 2 (後書き)

次回「パート 3」を金曜日に掲載します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6468y/>

彼らが旅に出た理由

2011年12月7日07時49分発行